

平安京右京三条三坊四町跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

平安京右京三条三坊四町跡

2012年

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

序 文

京都市内には、いにしへの都平安京をはじめとして、数多くの埋蔵文化財包蔵地（遺跡）が点在しています。平安京以前にさかのぼる遺跡及び平安京建都以来、今日に至るまで営々と生活が営まれ、各時代の生活跡が連綿と重なりあっています。このように地中に埋もれた埋蔵文化財（遺跡）は、過去の京都の姿をうかびあがらせてくれます。

財団法人京都市埋蔵文化財研究所は、遺跡の発掘調査をとおして京都の歴史の解明に取り組んでいます。その調査成果を市民の皆様広く公開し、活用していただけるよう努めていくことが責務と考えています。現地説明会の開催、写真展や遺跡めぐり、京都市考古資料館での展示公開、小中学校での出前授業、ホームページでの情報公開などを積極的に進めているところです。

このたび、建物建設工事に伴う平安京跡・西ノ京遺跡の発掘調査について調査成果を報告いたします。本報告の内容につきましてお気づきのことがございましたら、ご教示賜りますようお願い申し上げます。

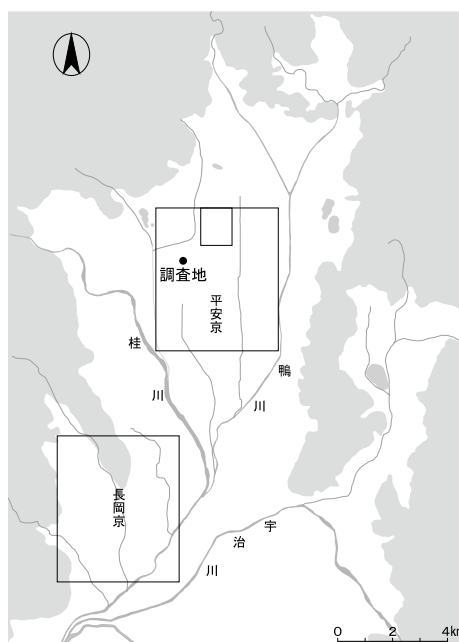
末尾になりましたが、当調査に際しまして多くのご協力とご支援を賜りました多くの関係各位に厚く感謝し、御礼を申し上げます。

平成24年8月

財団法人 京都市埋蔵文化財研究所
所 長 井 上 満 郎

例 言

- 1 遺 跡 名 平安京右京三条三坊四町跡・西ノ京遺跡（文化財保護課番号 11 H 426）
- 2 調査所在地 京都市中京区西ノ京桑原町1（島津製作所敷地内）
- 3 委 託 者 太平工業株式会社 代表取締役社長 吉田由起夫
- 4 調査期間 2012年3月5日～2012年6月23日
- 5 調査面積 1,094 m²
- 6 調査担当者 田中利津子・辻 裕司
- 7 使用地図 京都市発行の都市計画基本図（縮尺1：2,500）「花園」「山ノ内」を参考にし、作成した。
- 8 使用測地系 世界測地系 平面直角座標系Ⅵ（ただし、単位（m）を省略した）
- 9 使用標高 T.P.：東京湾平均海面高度
- 10 使用土色名 農林水産省農林水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』に準じた。
- 11 遺構番号 通し番号を付し、遺構の種類を前に付けた。
- 12 遺物番号 種類ごとに通し番号を付し、土器類は番号のみとしたが、瓦類は「瓦」、土製品は「土」、金属製品は「金」、石製品は「石」、木製部材は「木」をそれぞれ付し、写真番号も同一とした。
- 13 本書作成 田中利津子
- 14 備 考 上記以外に調査・整理ならびに本書作成には、資料業務職員および調査業務職員があたった。



(調査地点図)

目 次

1. 調査経過	1
2. 位置と環境	3
(1) 位置と環境	3
(2) 周辺の調査	3
3. 遺 構	7
(1) 基本層序	7
(2) 遺構の概要	7
(3) 江戸時代から室町時代の遺構	7
(4) 平安時代の遺構	13
(5) 古墳時代の遺構	23
4. 遺 物	24
(1) 遺物の概要	24
(2) 土器類	24
(3) 瓦類	36
(4) 土製品	39
(5) 金属製品	39
(6) 石製品	39
(7) 木製部材	40
(8) その他の遺物	40
5. ま と め	43
6. 付章 自然科学分析	46

図 版 目 次

図版1	遺構	平安時代全景（西から）
図版2	遺構	1 建物1 検出状況（西から） 2 建物1 柱穴検出状況（北から）
図版3	遺構	1 建物1 柱穴171 断割状況（北東から） 2 柱穴171 礎板検出状況（北から）

	3	建物1柱穴172断割状況（北西から）
	4	柱穴172礎板検出状況（北から）
図版4	遺構	1 建物1柱穴175礎板検出状況（北から）
	2	建物1柱穴182断割状況（南から）
	3	建物1柱穴180断面（南から）
図版5	遺構	1 建物2（北西から）
	2	建物3（北西から）
図版6	遺構	1 溝152・築地1（北から）
	2	溝10・杭列検出状況（西から）
図版7	遺構	1 溝219検出状況（北北東から）
	2	溝89検出状況（北東から）
図版8	遺物	出土土器1
図版9	遺物	出土土器2
図版10	遺物	出土土器3
図版11	遺物	瓦類
図版12	遺物	土製品・金属製品・木製部材

挿 図 目 次

図1	調査前風景（北西から）	1
図2	作業状況（西から）	1
図3	社内説明会（南から）	1
図4	調査区配置図（1：500）	2
図5	調査区および周辺の調査位置図（1：5,000）	5
図6	北壁断面図（1：100）	8
図7	東壁・南壁断面図（1：100）	9
図8	遺構平面図 [室町時代から江戸時代]（1：300）	10
図9	遺構平面図 [平安時代]（1：300）	12
図10	建物4柱穴3（東から）	13
図11	建物1、柱列1・2実測図（1：100）	14
図12	建物2実測図（1：100）	16
図13	建物3実測図（1：80）	17

図14	築地1柱穴実測図（1：80）	18
図15	溝10杭列実測図（1：50）	19
図16	溝10・155断面図（1：50）	20
図17	溝10・152・155・205・208断面図（1：40）	21
図18	遺構平面図〔古墳時代〕（1：300）	22
図19	溝88・89・219断面図（1：40）	23
図20	土器実測図1（1：4）	25
図21	土器実測図2（1：4）	27
図22	土器実測図3（1：4）	28
図23	土器実測図4（1：4）	31
図24	土器実測図5（1：4）	33
図25	土器実測図6（1：4）	35
図26	軒瓦拓影・実測図（1：4）	37
図27	平瓦拓影・実測図（1：6）	38
図28	土製品実測図（1：4）	39
図29	金属製品実測図（1：1）	39
図30	石製品実測図（1：4）	39
図31	木製部材実測図1（1：8）	41
図32	木製部材実測図2（1：8）	42
図33	古墳時代遺構配置図（1：800）	43
図34	建物配置図（1：500）	44
図35	溝断面図および分析地点の模式柱状図	46
図36	花粉化石群集の層位分布	48
図37	花粉化石	49

表 目 次

表1	周辺調査一覧表	4
表2	遺構概要表	7
表3	遺物概要表	24
表4	花粉分析結果	47

平安京右京三条三坊四町跡

1. 調査経過

今回の発掘調査は、鳥津製作所新棟建設工事に伴う発掘調査である。鳥津製作所敷地内では、これまでたびたび遺跡調査が行われており、今回の発掘調査は当研究所が実施する11次調査となる。

調査地は平安京跡にあたっており、周辺の調査でも多数の遺構が見つかることから、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下「文化財保護課」という。）が試掘調査を実施したところ、平安時代の宇多小路の東側溝や姉小路の南側溝などの遺構が確認された。これを受けて文化財保護課は鳥津製作所に対して埋蔵文化財調査の指導を行い、財団法人京都市埋蔵文化財研究所が委託を受け、発掘調査を実施することとなった。

調査区は文化財保護課の指導に基づき、当初は東西長60m・南北長22m・東辺の南北長7mの南東部が凹む鉤型に設定した。さらに調査中に調査区東部で掘立柱建物の柱列を検出し、柱列の一部が調査区外に延びることが判明したため、文化財保護課の指導を受け、南東部に約115㎡の拡張区を設定し、調査面積は1,060㎡となった（図4）。

調査は2012年3月5日から開始した。最初に盛土から室町時代の耕作土を0.8～1.5mの深さまで機械掘削したのち、地山上で古墳時代から江戸時代の4時期の調査を実施した。各遺構面では遺構検出・遺構登録を行い、写真撮影・遺構実測を行った。6月1日に一旦調査を終了した。

6月23日の調査区の埋戻し作業の際、調査区外の東部で面積34㎡の確認調査を行ったとこ



図1 調査前風景（北西から）



図2 作業状況（西から）



図3 社内説明会（南から）

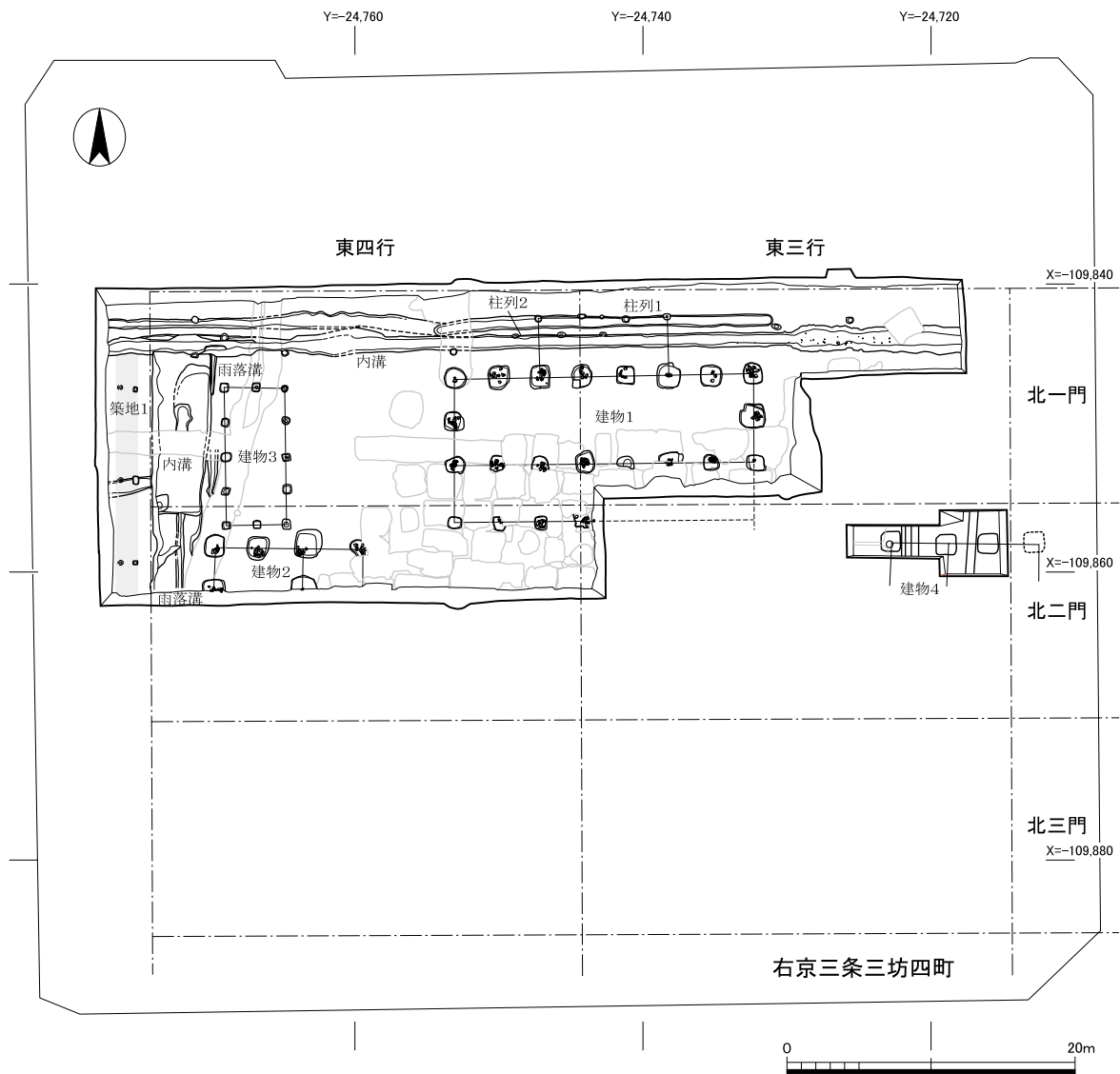


図4 調査区配置図 (1 : 500)

ろ、柱穴3基を検出し、新たな掘立柱建物が存在することを確認した。

なお、調査中は適宜、文化財保護課の臨検を受けた。調査期間中の5月8日(火)・16日(水)・31日(木)に島津製作所の社員を対象に社内説明会を行い、約350名の参加があった。

2. 位置と環境

(1) 位置と環境

調査地は京都盆地北西に位置し、紙屋川（天神川）の形成した扇状地に立地している。紙屋川は鷹峯を源流とし、京都盆地西部をほぼ南流して、西ノ京円町を経て太秦の南東で御室川に、吉祥院で桂川に合流する。現在の河道は20世紀前葉に付け替えられたものである。たびたび洪水を引き起こし、昭和10年（1935）の大洪水の際は大きな被害を出している。調査地北側には旧河道の痕跡が北北東から南南西に向かう道路や地割として残っている。また調査地の現地形はわずかに西から東へ傾斜している。これは紙屋川が氾濫したことによる。

調査地は『京都市遺跡地図』では平安京右京三条三坊四町および西ノ京遺跡として周知されている¹⁾。西ノ京遺跡は、おおそ北は丸太町通、東は西大路通東側、南は六角通、西は西小路通に囲まれた南北1.2km・東西0.8kmの範囲に広がる遺跡で、遺構の検出は少ないものの弥生時代から古墳時代の遺物が出土している。また、平安京右京三条三坊四町については『拾芥抄』によると平安時代後期には大江匡房の所領、西側の五町・十一町・十二町は棲霞寺の所領があったことがわかる²⁾。

(2) 周辺の調査（図5、表1）

調査地周辺では、これまでに多数の調査を実施している。主な調査成果については図5・表1にまとめた。

見つかった遺構・遺物の時期は、西ノ京遺跡に関わる弥生時代から古墳時代、平安京に関わる平安時代前期から中期、平安時代後期以降に分けることができる。

西ノ京遺跡については、調査地北西側の西ノ京徳大寺町の調査（図5-21）で竪穴住居1棟のほか土坑を検出し、古墳時代中期の土師器・須恵器が出土した。また、この南側の調査（図5-22）や調査地北側の調査（図5-16・25）の16では遺構は検出していないが古墳時代中期の土師器・須恵器・滑石製模造品が出土、25では溝や落込を検出し、弥生土器や古墳時代の土師器・須恵器が出土しており、遺跡の広がりを考えるうえで注目される。その他にも西大路御池交差点南東側の西ノ京南原町の調査では古墳時代の溝・土坑などを確認している³⁾。なお、遺構には伴わないが、尖頭器・石鏃が調査地北側の調査16などで出土しており、旧石器時代や縄文時代にさかのぼる遺跡が所在している可能性も考えられる。

右京三条三坊周辺では平安時代前期から中期の遺構が良好な状態で遺存しており、それぞれの調査で建物・柵・井戸・土坑・柱穴などを多数検出している。右京三条二坊十六町の調査（図5-15）では、平安時代中期の1町規模の邸宅の全容がほぼ明らかとなった。出土した墨書土器から「齋宮」の邸宅と推定できる。三条三坊五町の調査（図5-18・19）では、南東部で平安時代前期の大規模な掘立柱建物を検出しており、1町規模の邸宅であった可能性が高い。調査地北の右京三条三坊三町の調査（図5-16・25）では、平安時代前期から中期の掘立柱建物5棟・柵1列・井戸

表1 周辺調査一覧表

番号	調査概要	文献	備考
1	平安時代の西堀川小路路面・西側溝・西堀川などを検出	註4	
2	平安時代の建物・溝などを検出	註5	西大路御池駅駐輪場の調査
3	詳細不明		古代文化調査会の調査 未報告
4	平安時代の建物・井戸などを検出	註6	
5	鎌倉時代から室町時代の土取跡・柱穴、江戸時代の耕作地などを検出	註7	
6	平安時代の野寺小路西側溝・井戸・柱穴、鎌倉時代の野寺小路川・水利施設などを検出	註8	
7	平安時代の三条坊門小路南側溝・野寺小路東西側溝・柵、野寺小路川などを検出	註9	島津製作所8次調査
8	平安時代の建物・柵・土坑などを検出	註10	(財)古代学協会の調査
9	平安時代の三条坊門小路南側溝・建物・門・柵・井戸、道祖大路川などを検出 絵馬が出土	註11	島津製作所9次調査
10	平安時代の井戸・土坑・柱穴、室町時代の溝などを検出	註12	西大路御池駅の調査
11	平安時代の建物・柵・溝、野寺小路川などを検出	註13	西大路御池駅昇降口の調査
12	平安時代の三条坊門小路南側溝・道祖大路西側溝、道祖大路川などを検出	註14	西大路御池駅昇降口の調査
13	平安時代の溝・柱穴、中世の井戸などを検出	註15	西京高校校内の調査
14	平安時代の押小路南北側溝・建物・井戸、野寺小路川などを検出	註16	西京高校校内の調査
15	平安時代の園池・建物群・井戸・道路、室町時代から江戸時代の耕作溝などを検出 「齋宮」などと記した墨書土器が出土	註17	西京高校校内の調査 「齋宮」の邸宅跡と推定できる
16	平安時代の建物・柵・井戸・溝・湿地状の落ち込みなどを検出	註18	島津製作所2次調査
17	平安時代の建物・溝・土坑などを検出	註18	島津製作所3次調査
18	平安時代の建物・柵・溝などを検出	註19	島津製作所6次調査
19	平安時代の建物・柵・井戸・溝などを検出	註18	島津製作所5次調査
20	遺構未検出	註20	日開調査設計コンサルタントの調査
21	古墳時代の堅穴住居・土坑・河川、平安時代の建物・井戸・溝・土坑などを検出	註21	(財)古代学協会の調査
22	古墳時代の流路、平安時代の建物・柵・溝・土坑・木棺墓などを検出 木棺墓の副葬品として化粧道具などが出土	註18	島津製作所1次調査
23	平安時代の整地層を検出	註22	島津製作所7次調査
24	湿地状の堆積、室町時代以降の耕作土を検出	註18	島津製作所4次調査
25	古墳時代の溝、落込み、平安時代の井戸、溝、小径、土坑、柱穴列などを検出	註23	島津製作所10次調査

2基・溝3条・湿地状の落込などを検出した。また、三条三坊九町の調査(図5-21)では三彩の精巧な獅子頭、三条三坊十町の調査(図5-22)では木棺墓から副葬品として漆皮の折敷の上に載せた土器器皿・毛抜き・墨などの化粧道具、銅鏡、須恵器壺などがまとまって出土しており、相応の身分の貴族が居住していたことが推定できる。

その一方、三条三坊十二町の調査(図5-24)では、ほぼ全域に湿地が広がっていた。また、このことから湿地や河川を避けた地形の条件が良い場所に建物などの選地が行われたことがわかる。

平安時代後期以降、中でも室町時代になると、ほとんどの調査で耕作土と耕作溝を検出している



図5 調査区および周辺の調査位置図（1：5,000）

ことから、調査地周辺のほぼ全域が耕作地となっていたことは明らかである。耕作地としての利用は近代の開発が及ぶまで続いた。

註

- 1) 『京都市遺跡地図台帳【第8版】』京都市文化市民局 2007年。
- 2) 歴史的状況については次の文献を参考にした。京都市編『京都の歴史』学芸書林 1968～1976年。『京都市の地名』平凡社 1979年。『平安京提要』角川書店 1994年など。
- 3) 註1)に同じ。
- 4) 「右京三條二坊」『昭和57年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1984年。
- 5) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-24 平安京右京三條二坊十一町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2007年。
- 6) 「平安京右京三條二坊」『平安京跡発掘調査概要 京都市埋蔵文化財研究所概要集1978』（財）京都市埋蔵文化財研究所 1979年。
- 7) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2004-19 平安京右京三條二坊十三町跡』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2005年。

- 8) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2006-1 平安京右京三条二坊十四町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2006年。
- 9) 「平安京右京三条二坊2」『平成元年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1994年。
- 10) 「平安京右京三条二坊十四町跡 島津メディカルプラザ新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡』(財)古代学協会 2009年。
- 11) 「平安京右京三条二坊」『平成9年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2000年。
- 12) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2001-6 平安京右京三条二坊十五町・三坊二町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年。
- 13) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報2003-8 平安京右京三条二坊十五町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2004年。
- 14) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2005-5 平安京右京三条二坊十五町跡・三坊二町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年。
- 15) 「平安京右京三条二坊」『昭和62年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1991年。
- 16) 「右京三条二坊(2)」『昭和56年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1983年。『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年。
- 17) 『平安京右京三条二坊十五・十六町』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第21冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 2002年。
- 18) 『平安京右京三条三坊』京都市埋蔵文化財研究所調査報告第10冊 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1990年。
- 19) 「平安京右京三条三坊」『昭和63年度 京都市埋蔵文化財調査概要』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1993年。
- 20) 『平安京右京三条三坊六町・西ノ京遺跡』株式会社日開調査設計コンサルタント 2007年。
- 21) 「平安京右京三条三坊九町跡 島津本社内新築工事に伴う発掘調査」『平安京右京内5遺跡』(財)古代学協会 2009年。
- 22) 「HR-145」『京都市内遺跡試掘立会調査概報 平成元年度』京都市文化観光局 1990年。
- 23) 『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-4 平安京右京三条三坊三町跡』(財)京都市埋蔵文化財研究所 2005年。

3. 遺 構

(1) 基本層序 (図6・7)

調査地全域に厚さ0.3～1.0mの現代盛土が拡がり、一部既存建物の基礎による攪乱が1.7mの深さにまで及んでいる。盛土下の1・2層は紙屋川(天神川)の氾濫に伴う砂礫などが厚さ0.3～0.6m堆積する。砂礫層下の4～6層はオリーブ褐色シルトなどで、厚さ0.1～0.3mある。氾濫堆積物を母材とした耕作土で、出土遺物は確認していないが江戸時代から近代と推定できる。8・9層は灰オリーブ色シルトで厚さは0.1～0.2mある。氾濫堆積物を母材とした耕作土で、出土遺物は確認していないが江戸時代と推定できる。27層は暗灰黄色シルトで厚さ0.05～0.15mある耕作土で、室町時代の遺物が出土した。30層は人為的に施された小礫を多量に包含する層で厚さ0.03～0.15mあり、調査区全面に広がる。礫に混じって平安時代から室町時代の遺物が出土した。耕作土の床土と考える。10次調査で検出した礫敷1は、この床土である可能性がある。30層下は、調査区北半は地山となり、平安時代や古墳時代の遺構面となる。南半では黒褐色シルトからなる厚さ0.1～0.15mの平安時代整地層が堆積し、この面が平安時代の遺構面となる。地山の標高は東端で31.2m、西端で31.1m、南端で30.9mあり、わずかに南西へ下がり、この箇所には平安時代整地層が堆積する。

(2) 遺構の概要

調査では地山上面で遺構検出を行い、江戸時代から古墳時代にわたる4時期の遺構を検出した。

検出した遺構には、江戸時代の土取穴、室町時代の耕作溝・柱穴および平安時代の掘立柱建物・溝・築地・柱列、古墳時代の溝などがある。検出した遺構総数は223基である。ここでは遺跡を時代別に分けて報告する。

なお、検出遺構および出土遺物の時期の判定は、平安京・京都I期～XIV期の編年案に準用する¹⁾。

(3) 江戸時代から室町時代の遺構 (図版1、図8)

江戸時代

江戸時代の遺構には土取穴がある。調査区南東一帯で検出した。平面形は方形から長方形で近接

表2 遺構概要表

時 代	遺 構	備 考
古墳時代	溝77・88・89・219・221	
平安時代	建物1～4、柱穴列1・2、溝10・75・150・152・205・208、 礫敷153、整地166、築地1、柱穴	
室町時代	耕作溝群、柱穴	
江戸時代	土取穴	

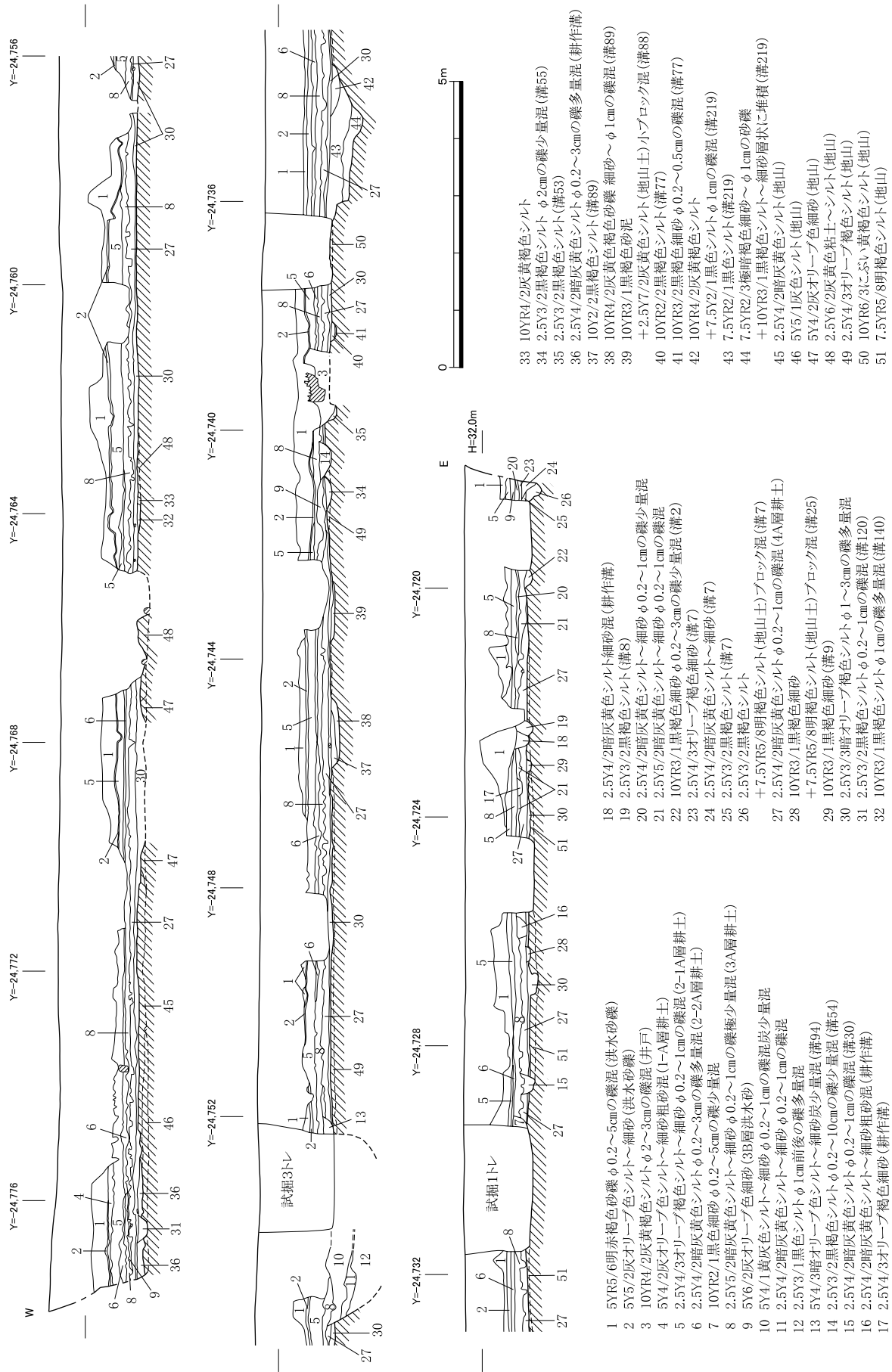
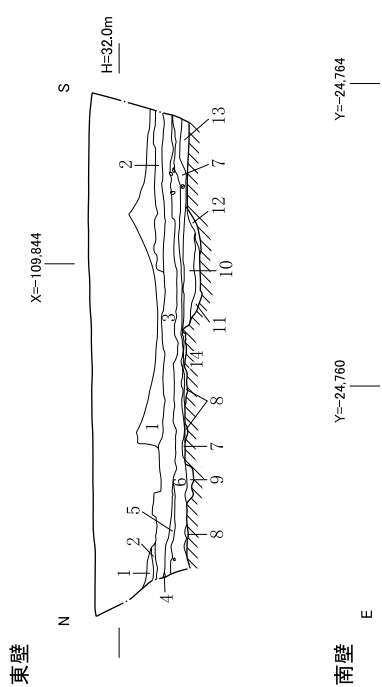


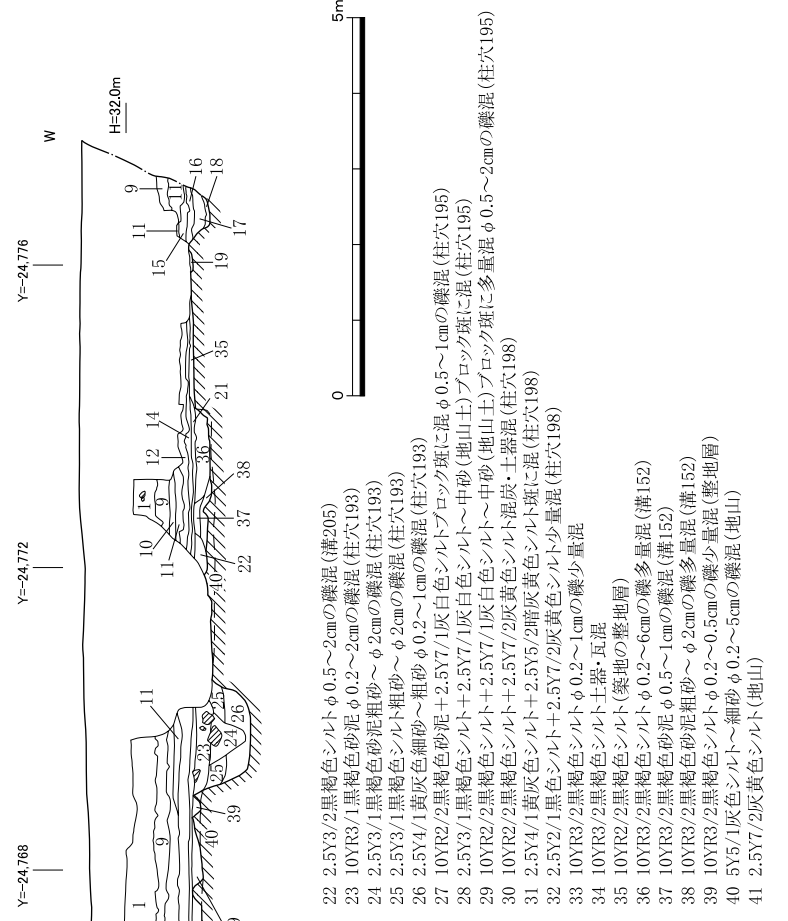
図6 北壁断面図 (1:100)

- 1 5YR5/6明赤褐色砂礫 φ 0.2~5cmの礫混(洪水砂礫)
- 2 5Y5/2灰オリーブ色シルト~細砂(洪水砂礫)
- 3 10YR4/2灰黄褐色シルト φ 2~3cmの礫混(井戸)
- 4 5Y4/2灰オリーブ色シルト~細砂粗砂混(1-A層耕土)
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫混(2-1A層耕土)
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト φ 0.2~3cmの礫多量混(2-2A層耕土)
- 7 10YR2/1黒色細砂 φ 0.2~5cmの礫少量混
- 8 2.5Y5/2暗灰黄色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫極少量混(3A層耕土)
- 9 5Y6/2灰オリーブ色細砂(3B層洪水砂)
- 10 5Y4/1黄灰色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫混炭少量混
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫混
- 12 2.5Y3/1黒色シルト φ 1cm前後の礫多量混
- 13 5Y4/3暗オリーブシルト~細砂炭少量混(溝94)
- 14 2.5Y3/2黒褐色シルト φ 0.2~10cmの礫少量混(溝54)
- 15 2.5Y4/2暗灰黄色シルト φ 0.2~1cmの礫混(溝30)
- 16 2.5Y4/2暗灰黄色シルト~細砂粗砂混(耕作溝)
- 17 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂(耕作溝)
- 18 2.5Y4/2暗灰黄色シルト細砂混(耕作溝)
- 19 2.5Y3/2黒褐色シルト(溝8)
- 20 2.5Y4/2暗灰黄色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫少量混
- 21 2.5Y5/2暗灰黄色シルト~細砂 φ 0.2~1cmの礫混
- 22 10YR3/1黒褐色細砂 φ 0.2~3cmの礫少量混(溝2)
- 23 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂(溝7)
- 24 2.5Y4/2暗灰黄色シルト~細砂(溝7)
- 25 2.5Y3/2黒褐色シルト(溝7)
- 26 2.5Y3/2黒褐色シルト
- 27 2.5Y4/2暗灰黄色シルト(地山土)ブロック混(溝7)
- 28 10YR3/1黒褐色細砂
- 29 7.5YR5/8明褐色シルト(地山土)ブロック混(溝25)
- 30 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルト~細砂 φ 1~3cmの礫多量混
- 31 2.5Y3/2黒褐色シルト φ 0.2~1cmの礫混(溝120)
- 32 10YR3/1黒褐色シルト φ 1cmの礫多量混(溝140)
- 33 10YR4/2灰黄褐色シルト
- 34 2.5Y3/2黒褐色シルト φ 2cmの礫少量混(溝55)
- 35 2.5Y3/2黒褐色シルト(溝53)
- 36 2.5Y4/2暗灰黄色シルト φ 0.2~3cmの礫多量混(耕作溝)
- 37 10YR2/2黒褐色シルト(溝89)
- 38 10YR4/2灰黄褐色砂礫 細砂~φ 1cmの礫混(溝89)
- 39 10YR3/1黒褐色砂泥
- 40 2.5Y7/2灰黄色シルト(地山土)小ブロック混(溝88)
- 41 10YR3/2黒褐色細砂 φ 0.2~0.5cmの礫混(溝77)
- 42 10YR4/2暗灰黄色シルト
- 43 7.5YR2/1黒色シルト φ 1cmの礫混(溝219)
- 44 7.5YR2/3極暗褐色細砂~φ 1cmの砂礫
- 45 2.5Y4/2暗灰黄色シルト~細砂層状に堆積(溝219)
- 46 5Y5/1灰色シルト(地山)
- 47 5Y4/2灰オリーブ色細砂(地山)
- 48 2.5Y6/2暗灰黄色粘土~シルト(地山)
- 49 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト(地山)
- 50 10YR6/3にぶい黄褐色シルト(地山)
- 51 7.5YR5/8明褐色シルト(地山)

- 1 5YR5/6明赤褐色砂礫φ0.2～5cmの礫混(洪水砂礫)
- 2 2.5Y4/3オリーブ褐色微砂～細砂φ0.2～1cmの礫混(2-1A層耕土)
- 3 5Y6/2灰オリーブ色細砂(3B層洪水砂)
- 4 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～細砂φ0.2～1cmの礫少量混
- 5 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂(溝7)
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト細砂混(溝7)
- 7 10YR4/3にぶい黄褐色砂礫南は粗砂へ移行(溝7)
- 8 2.5Y3/2黒褐色シルト+7.5YR5/8明褐色シルト(地山土)ブロック混(溝7)
- 9 2.5Y3/2黒褐色シルト+7.5YR5/8明褐色シルト(地山土)ブロック多量混(溝4)
- 10 10YR2/2黒褐色シルト+7.5YR5/8明褐色シルト(地山土)ブロック多量混φ0.2～1cmの礫混(溝10)
- 11 10YR2/2黒褐色シルト～細砂φ0.2～1cmの礫混(地山土)ブロック少量混φ0.2～1cmの礫少量混(溝10)
- 12 10YR2/2黒褐色シルト+7.5YR5/8明褐色シルト(地山土)ブロック少量混(溝10)
- 13 10YR3/2黒褐色シルトφ1～2cmの礫少量混(整地層)
- 14 7.5YR5/8明褐色シルト(地山)



東壁



南壁

- 1 5YR5/6明赤褐色砂礫φ0.2～5cmの礫混(洪水砂礫)
- 2 10YR4/2暗褐色シルト～細砂φ0.5～3cmの礫混(洪水砂礫)
- 3 10YR3/2黒褐色シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫粗砂～φ3cmの礫混(土取穴)
- 4 10YR3/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルトブロック混粗砂～φ3cmの礫混(土取穴)
- 5 5Y4/2灰オリーブ細砂+2.5Y4/3オリーブ褐色砂礫細砂～φ1cmの礫混(土取穴)
- 6 10YR3/2黒褐色シルト+2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～中砂φ0.5～3cmの礫混(土取穴)
- 7 2.5Y4/3オリーブ褐色細砂～粗砂φ0.5～3cmの礫混(土取穴)
- 8 10YR3/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルトブロック少量混粗砂～φ3cmの礫混(土取穴)
- 9 2.5Y4/3オリーブ褐色シルト～細砂φ0.2～1cmの礫混(2-1A層耕土)
- 10 2.5Y5/3黄褐色シルトφ0.2～1cmの礫少量混(耕土)
- 11 2.5Y4/2暗灰黄色シルトφ0.2～3cmの礫多量混(2-2A層耕土)
- 12 2.5Y5/2暗灰黄色シルト～細砂φ0.2～1cmの礫少量混(3A層耕土)
- 13 2.5Y4/2暗灰黄色シルト～中砂φ0.5～5cmの礫少量混(耕作溝)
- 14 2.5Y4/2暗灰黄色シルトφ0.2～1cmの礫混(4A層耕土)
- 15 5Y4/2灰オリーブ色シルトφ0.2～0.5cmの礫少量混(溝120)
- 16 2.5Y4/2暗灰黄色シルトφ0.2～1cmの礫混(溝120)
- 17 2.5Y3/2黒褐色シルトφ0.2～4cmの礫混(溝115)
- 18 2.5Y3/2黒褐色粘土～シルト(溝120)
- 19 2.5Y3/2黒褐色シルトφ0.2～0.5cmの礫少量混(整地層)
- 20 10YR4/1灰褐色シルトφ0.2～0.5cmの礫混(耕作溝)
- 21 2.5Y3/3暗オリーブ褐色シルトφ1～3cmの礫多量混
- 22 2.5Y3/2黒褐色シルトφ0.5～2cmの礫混(溝205)
- 23 10YR3/1黒褐色砂泥φ0.2～2cmの礫混(柱穴193)
- 24 2.5Y3/1黒褐色砂泥粗砂～φ2cmの礫混(柱穴193)
- 25 2.5Y3/1黒褐色シルト粗砂～φ2cmの礫混(柱穴193)
- 26 2.5Y4/1黄灰色細砂～粗砂φ0.2～1cmの礫混(柱穴193)
- 27 10YR2/2黒褐色砂泥+2.5Y7/1灰白色シルトブロック混に混φ0.5～1cmの礫混(柱穴195)
- 28 2.5Y3/1黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト～中砂(地山土)ブロック混に混φ0.5～1cmの礫混(柱穴195)
- 29 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト～中砂(地山土)ブロック混に多量混φ0.5～2cmの礫混(柱穴195)
- 30 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/2灰黄色シルト混炭・土器混(柱穴198)
- 31 2.5Y4/1黄灰色シルト+2.5Y5/2暗灰黄色シルト混に混(柱穴198)
- 32 2.5Y2/1黒色シルト+2.5Y7/2灰黄色シルト少量混(柱穴198)
- 33 10YR3/2黒褐色シルトφ0.2～1cmの礫少量混
- 34 10YR3/2黒褐色シルト土器・瓦混
- 35 10YR2/2黒褐色シルト(築地の整地層)
- 36 10YR3/2黒褐色シルトφ0.2～6cmの礫多量混(溝152)
- 37 10YR3/2黒褐色砂泥φ0.5～1cmの礫多量混(溝152)
- 38 10YR3/2黒褐色砂泥粗砂～φ2cmの礫多量混(溝152)
- 39 10YR3/2黒褐色シルトφ0.2～0.5cmの礫少量混(整地層)
- 40 5Y5/1灰色シルト～細砂φ0.2～5cmの礫混(地山)
- 41 2.5Y7/2灰黄色シルト(地山)

図7 東壁・南壁断面図 (1:100)

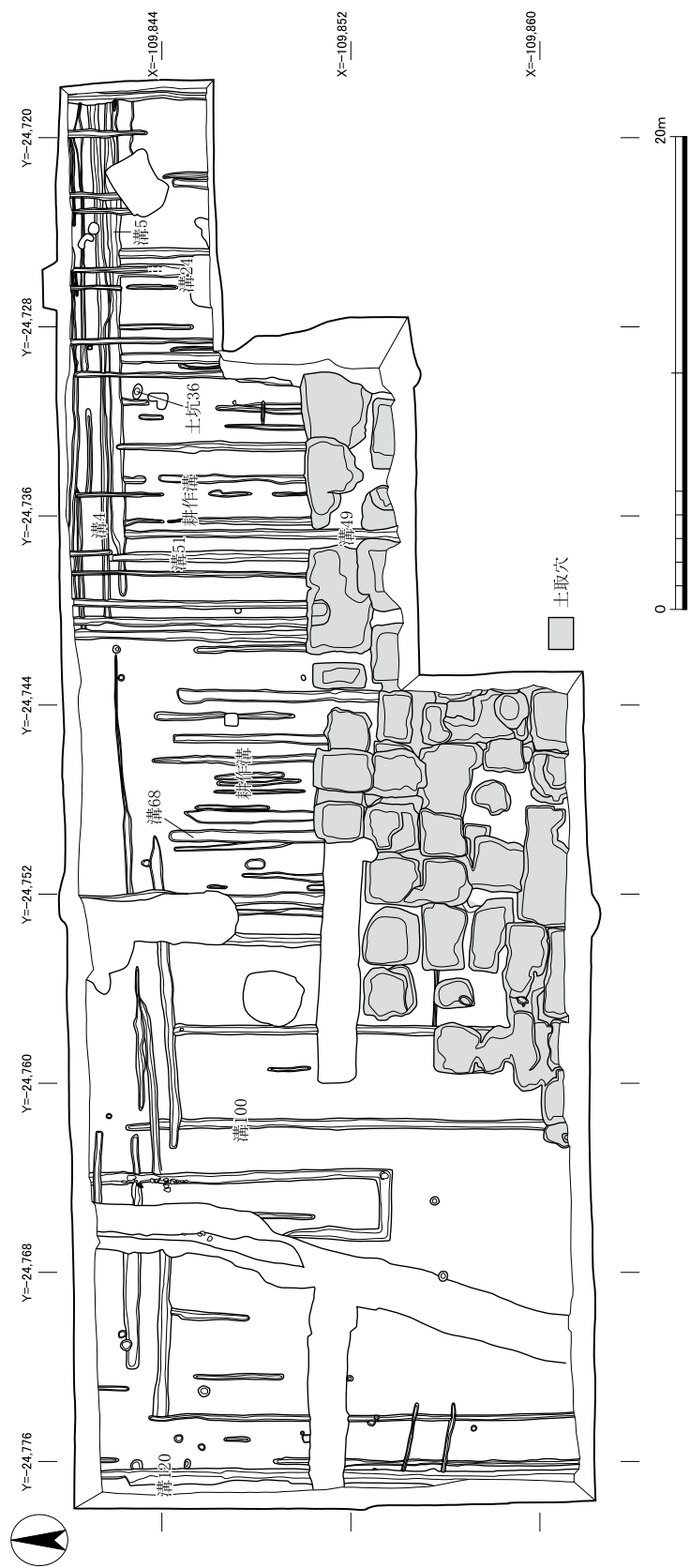


図8 遺構平面図 [室町時代から江戸時代] (1 : 300)

して並び、一辺2.0～3.0mある。土取穴の埋土上面は近世河川氾濫の洪水砂が堆積しており、埋土に混じって平安時代から江戸時代の遺物が出土した。

室町時代

室町時代の遺構には耕作溝や柱穴がある。溝は東西・南北方向を示すものがあり、概して東西方向の溝は調査区北端で、南北方向の溝はおもに中央以東で多く検出し、南北方向の溝が新しい。幅0.2～0.4m、深さ0.1～0.2mのものが大半を占める。埋土は黒褐色砂泥が主体である。ここでは、出土遺物を掲載した遺構について報告する。

溝4 北東部で検出した東西方向の溝である。東西端とも南北溝で途切れる。断面形は逆台形で、長さ21.7m以上、幅0.2～0.45m、深さ約0.1mで西に浅くなる。埋土は黒褐色砂泥に明褐色シルト（地山土）が混る。Ⅶ期の遺物が出土した。

溝5 溝4の南側で検出した東西方向の溝で、溝4に平行する位置にある。東端は南北溝と接合し、西端は中央東寄りで途切れる。断面形は逆台形で、長さ21.1m以上、幅0.2～0.45m、深さ約0.1mで西に浅くなる。埋土は黒褐色砂泥に褐色砂泥が混る。平安時代遺物が混入して出土した。

溝24 東部で検出した南北方向の溝である。北側は溝5と接合し、南は攪乱に削平される。断面形は浅い皿形で、長さ2.9m以上、幅0.5m、深さ約0.1mある。埋土は黒褐色砂泥で、平安時代の遺物が混入して出土した。

溝49 北側東部で検出した南北方向の溝である。北側は東西溝と接合するが、南側は調査区外に延びる。長さ11.7m以上、幅0.35～0.7m、深さ約0.1mある。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅷ期の遺物が出土した。

溝51 北側中央東寄りで検出した南北方向の溝である。北側は溝4と接合するが、南側は土取穴に削平される。断面形はU字形で、長さ10.7m以上、幅0.2～0.3m、深さ約0.15mある。埋土は黒褐色砂泥で、Ⅸ期の遺物が出土した。

溝68 北側中央部で検出した南北方向の溝である。北側は北部で途切れ、南側は土取穴に削平される。断面形は逆台形で、長さ6.6m以上、幅0.5m、深さ約0.07mある。埋土は黒褐色砂泥に褐色砂泥が混じる。Ⅶ～Ⅸ期の遺物が出土した。

溝100 北側中央西寄りで検出した南北方向の溝である。北側は途切れ、南側は土取穴に攪乱される。断面形は浅い皿形で、長さ17.6m以上、幅0.4m、深さ約0.1mである。埋土は黒褐色砂泥で、平安時代の遺物が混入して出土した。

溝120 西端で検出した南北方向の溝である。南北両端は調査区外に延びる。断面形は逆台形で、長さ22.0m以上、幅0.7m、深さ約0.1mある。埋土は黒褐色砂泥で、平安時代の遺物が混入して出土した。

土坑36 東部で検出した。平面形が楕円形の土坑で長径0.6m・短径0.4m、深さ0.2mである。埋土は黒褐色砂泥で、時期不明の砥石と平安時代の遺物が混入して出土した。

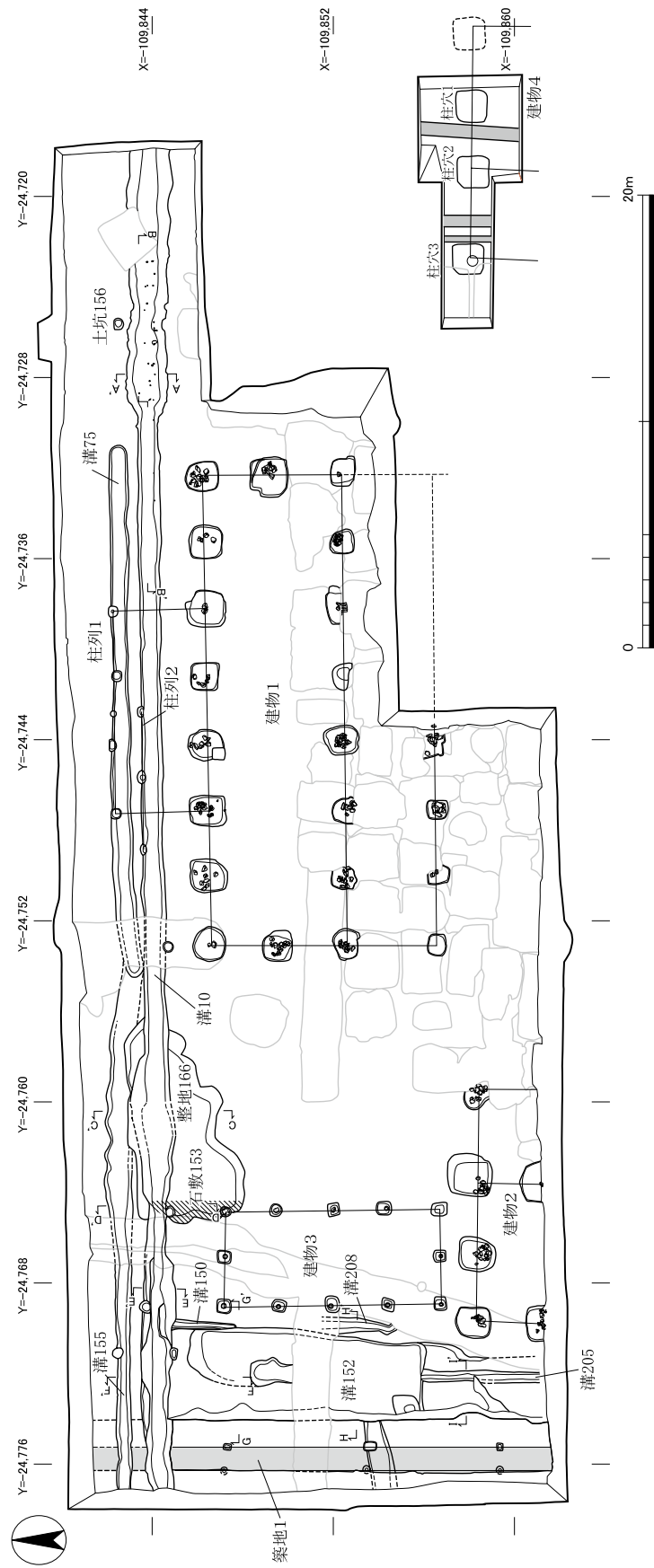


図9 遺構平面図 [平安時代] (1 : 300)

(4) 平安時代の遺構（図版1、図9）

建物・築地・溝などを検出した。検出した遺構はすべて平安時代前期に属する。

建物1（図版2～4、図11） 調査区中央東寄りで検出した東西棟掘立柱建物である。東西7間×南北2間で南に庇が付く。身舎の柱間は梁行・桁行ともに3m（10尺）、庇の出は4.2m（14尺）ある。柱穴の平面形は、ほぼ方形を呈し、検出面の規模は一辺1.2～1.8m、深さ0.65～1.0mある。柱穴には根固めの目的で大きさ10～30cmの石や瓦を入れており、柱はすべて抜き取られていた。大半の柱穴では底面よりやや上部に礎板が遺存していた。礎板は長さ67～55cm・幅30～40cm・厚さ8～14cmある。さらに、礎板下には厚さ3cmの薄板を数枚敷いた柱穴170～172・175・176がある。庇の柱穴には礎板は据えていない。建物1の北で、身舎の北柱筋に平行する柱列1・2を検出した。柱列1は、柱穴4基からなる。各柱穴は身舎桁行の柱筋と一致する。柱間3.0m（10尺）で身舎北柱筋から約4.2m（14尺）北に位置する。柱列2は柱穴3基からなる。各柱穴は身舎桁行柱間の中間に位置し、柱間約3.0m（10尺）で、身舎北柱筋から約3.0m（10尺）北に位置する。ともに建物1に付属する施設を構成する柱列と考えられる。

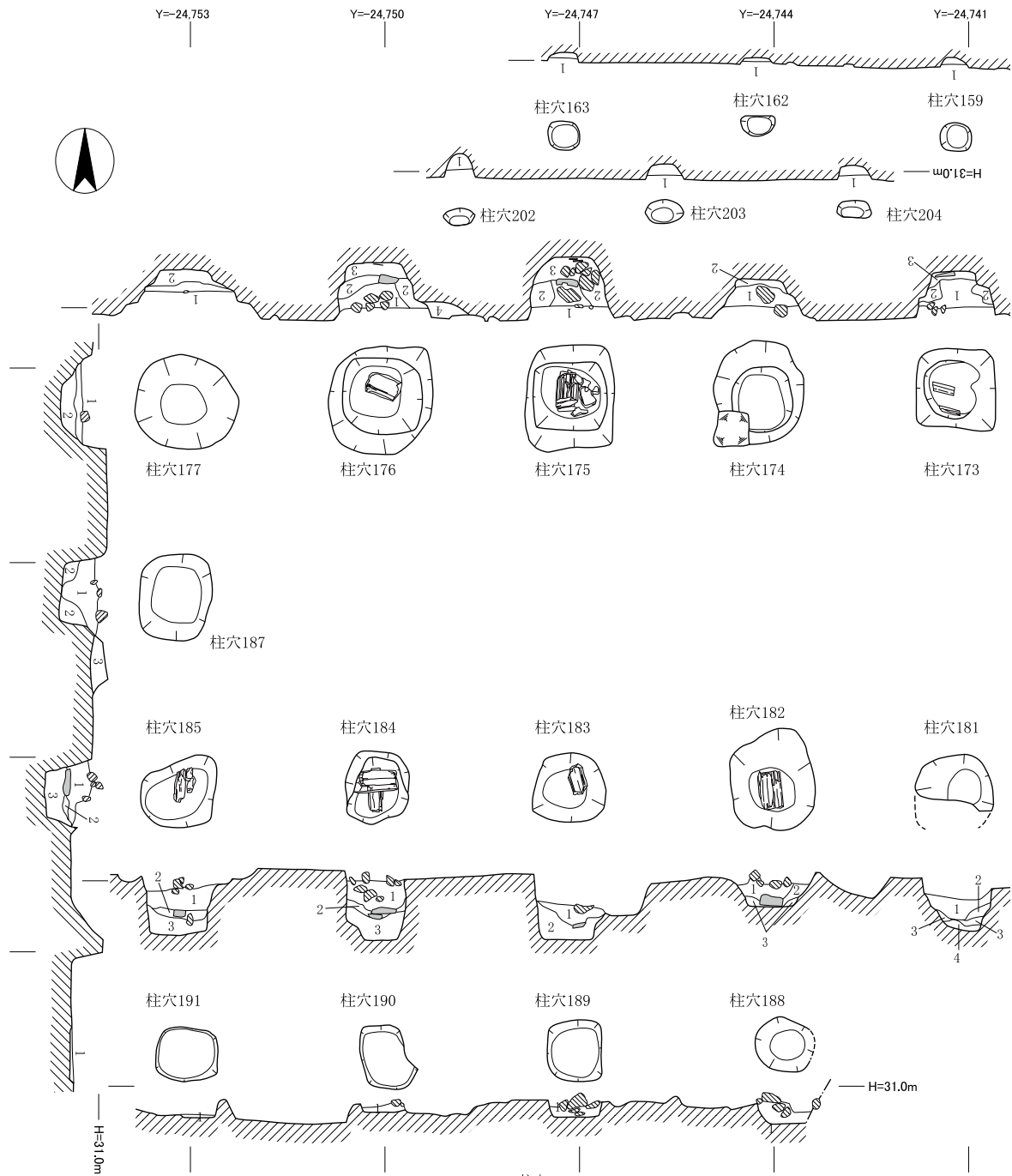
建物2（図版5、図12） 調査区南西で検出した南北棟掘立柱建物である。東西2間×南北1間以上で南に広がり、東に庇が付く。身舎の柱間は建物1と同規模で、梁行・桁行ともに3m（10尺）、庇の出は4.2m（14尺）ある。柱穴の平面形は、ほぼ方形を呈し、検出面の規模は一辺1.4～2.0m、深さ0.5～0.65mある。柱穴には根固めの目的で大きさ10～30cmの石を入れており、柱根は抜き取られていた。柱穴の底には礎板と考えられる厚さ1～3cmの薄板を数枚据えている。また、柱穴196の底には長さ38.8cm・幅24.8cm・厚さ22.8cmの直方体の部材が礎板として、柱穴192には縦44cm・横38cm・厚さ22cmの花崗岩の切石が据えられていた。

建物3（図版5、図13） 建物3は建物2の北で検出した南北棟である。東西2間×南北4間で柱間は梁行2.1m（7尺）・桁行2.4（8尺）mある。柱穴の平面形は、方形を呈し、検出面の規模は一辺0.5～0.6m、深さ0.1～0.5mある。柱根が遺存するものが数基ある。身舎棟筋が建物2の棟筋と揃うことから、建物2に付属する建物であると考えられる。

建物4（図10） 調査区外東部で検出した東西方向を示す3基の柱穴で、建物1の南東に位置し、建物1を挟んで建物2とほぼ対称位置を示す南北棟掘立柱建物で、西に庇が付く。身舎東側は調査区外に広がる。身舎柱間は東西約2.8m（9.3尺）、庇の出は約3.9m（13尺）あり、建物2よりやや小規模である。庇の柱穴には柱根が遺存していた。柱根の現存規模は径約40cm・高さ50cmで、外側は8面の面取りが施されている。柱の下には厚さ約1cmの礎板が据えられていた。



図10 建物4柱穴3（東から）



柱穴170

- 1 10YR3/1黒褐色シルト+10YR7/1灰白色シルト小ブロック
- 2 10YR3/1黒褐色シルト+10YR7/1灰白色シルト大ブロック
- 3 10YR7/1灰白色シルト+10YR3/1黒褐色シルト少量 粗砂混

柱穴171

- 1 10YR2/1黒褐色シルト+10YR4/4褐色シルトブロック少量
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥+10YR7/3にぶい黄褐色ブロック多量
- 3 10YR3/1黒褐色シルト+10YR7/1灰白色シルト大ブロック少量
- 4 10YR7/1灰白色シルト+10YR3/1黒褐色シルト
- 5 7.5YR2/1黒色シルト(溝219)

柱穴172

- 1 10YR2/2黒褐色砂泥+10YR7/3にぶい黄褐色ブロック多量
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥+10YR7/1灰白色シルト大ブロック多量
- 3 10YR2/1黒色シルト+5GY6/1オリーブ灰色シルトブロック
- 4 5Y5/1灰色シルト+10YR2/1黒色シルト少量 粗砂〜φ2cmの礫多量混

柱穴173

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥+10YR5/6黄褐色粘土大ブロック
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥+10YR5/6黄褐色シルトブロック φ0.5〜2cmの礫混
- 3 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y6/1黄灰色砂礫

柱穴174

- 1 10YR2/2黒褐色砂泥+10YR6/4にぶい黄褐色シルト小ブロック
- 2 10YR2/2黒褐色砂泥+2.5Y4/2暗灰黄色細砂 粗砂〜φ2cmの礫混

柱穴175

- 1 10YR2/1黒色シルト+2.5Y7/1灰白色シルトブロック
- 2 10YR2/1黒色シルト+10YR7/2〜6/4にぶい黄褐色シルトブロック混
- 3 10YR2/2黒褐色砂泥+2.5Y6/2灰黄色細砂 φ0.2〜2cmの礫混

柱穴176

- 1 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック少量
- 2 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト大ブロック多量 φ2〜3cmの礫混
- 3 2.5Y4/1黄灰色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック 粗砂〜φ0.5cmの礫混
- 4 10YR2/2黒褐色シルト(溝89)

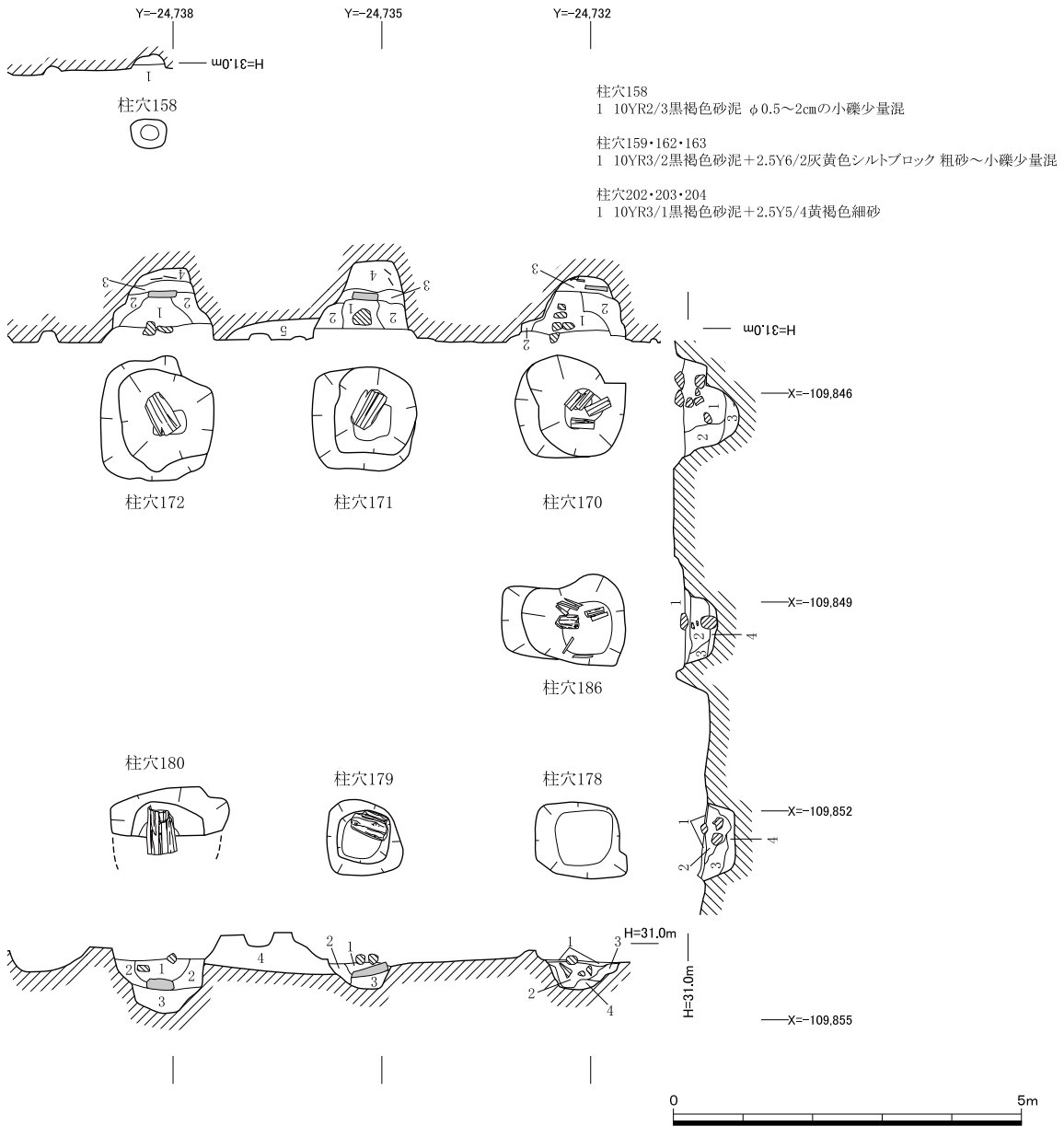
柱穴177

- 1 2.5Y2/1黒色シルト+10YR7/2にぶい黄褐色シルトブロック φ1〜2cmの礫少量混
- 2 2.5Y2/1黒色シルト

柱穴178

- 1 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック多量
- 2 10YR3/1黒褐色砂泥+10YR4/2灰黄褐色シルトブロック
- 3 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y7/1灰白色シルト大ブロック多量
- 4 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR2/2黒褐色シルト 粗砂〜φ1cmの礫混

図11 建物1、柱列1・2実測図(1:100)



柱穴179
 1 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR7/1灰白色シルト小ブロック
 2 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR2/2黒褐色シルト少量
 3 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト大ブロック少量

柱穴180
 1 2.5Y3/1黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック
 2 2.5Y3/1黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト大ブロック多量
 3 10YR5/1褐色シルト~細砂+2.5Y3/1黒褐色シルト少量
 4 7.5YR2/2黒色シルト(溝219)

柱穴181
 1 10YR2/2黒褐色シルト+10YR7/2にぶい黄褐色シルト大ブロック多量
 2 10YR2/2黒褐色シルト+10YR7/2にぶい黄褐色シルト小ブロック
 3 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR3/1黒褐色シルト少量
 4 7.5Y6/1灰色砂礫

柱穴182
 1 10YR 2/1黒色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト大ブロック
 2 10YR2/1黒色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック多量
 3 2.5Y7/1灰白色シルト~細砂+10YR2/1黒色シルト少量

柱穴183
 1 10YR2/2黒色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト~粘土小ブロック
 2 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR2/1黒色シルト少量

柱穴184
 1 10YR2/1黒色シルト+10YR7/1灰白色シルト小ブロック多量
 2 10YR2/1黒色シルト+10YR7/1灰白色シルト大ブロック
 3 10YR2/1黒色シルト+10YR7/1灰白色シルトブロック

柱穴158
 1 10YR2/3黒褐色砂泥 φ0.5~2cmの小礫少量混

柱穴159・162・163
 1 10YR3/2黒褐色砂泥+2.5Y6/2灰黄色シルトブロック 粗砂~小礫少量混

柱穴202・203・204
 1 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y5/4黄褐色細砂

柱穴185
 1 10YR2/1黒色シルト+10YR7/1灰白色シルト小ブロック
 2 10YR2/1黒色シルト+10YR7/1灰白色シルトブロック少量
 3 10YR7/1灰白色シルト~細砂+10YR2/1黒色シルト少量

柱穴186
 1 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト
 2 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルトブロック
 3 2.5Y7/1灰白色シルト+10YR2/2黒褐色シルトブロック少量
 4 10YR2/2黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルトブロック 粗砂混

柱穴187
 1 10YR2/1黒色シルト+2.5Y6/2灰黄色シルト φ0.5~1cmの礫少量混
 2 2.5Y6/2灰黄色シルト+10YR2/2黒色シルト少量
 3 10YR2/2黒色シルト(溝89)

柱穴188
 1 10YR3/1黒色シルト+10YR7/3にぶい黄褐色シルトブロック少量

柱穴189
 1 10YR3/1黒褐色シルト+7.5YR7/1灰白色シルト少量

柱穴190
 1 10YR3/1黒褐色シルト+2.5Y7/1灰白色シルト小ブロック

柱穴191
 1 5Y6/1灰色シルト+10YR2/1黒色シルト少量

2.5Y7/1灰白色~2.5Y6/1黄灰色シルト~砂礫(地山)

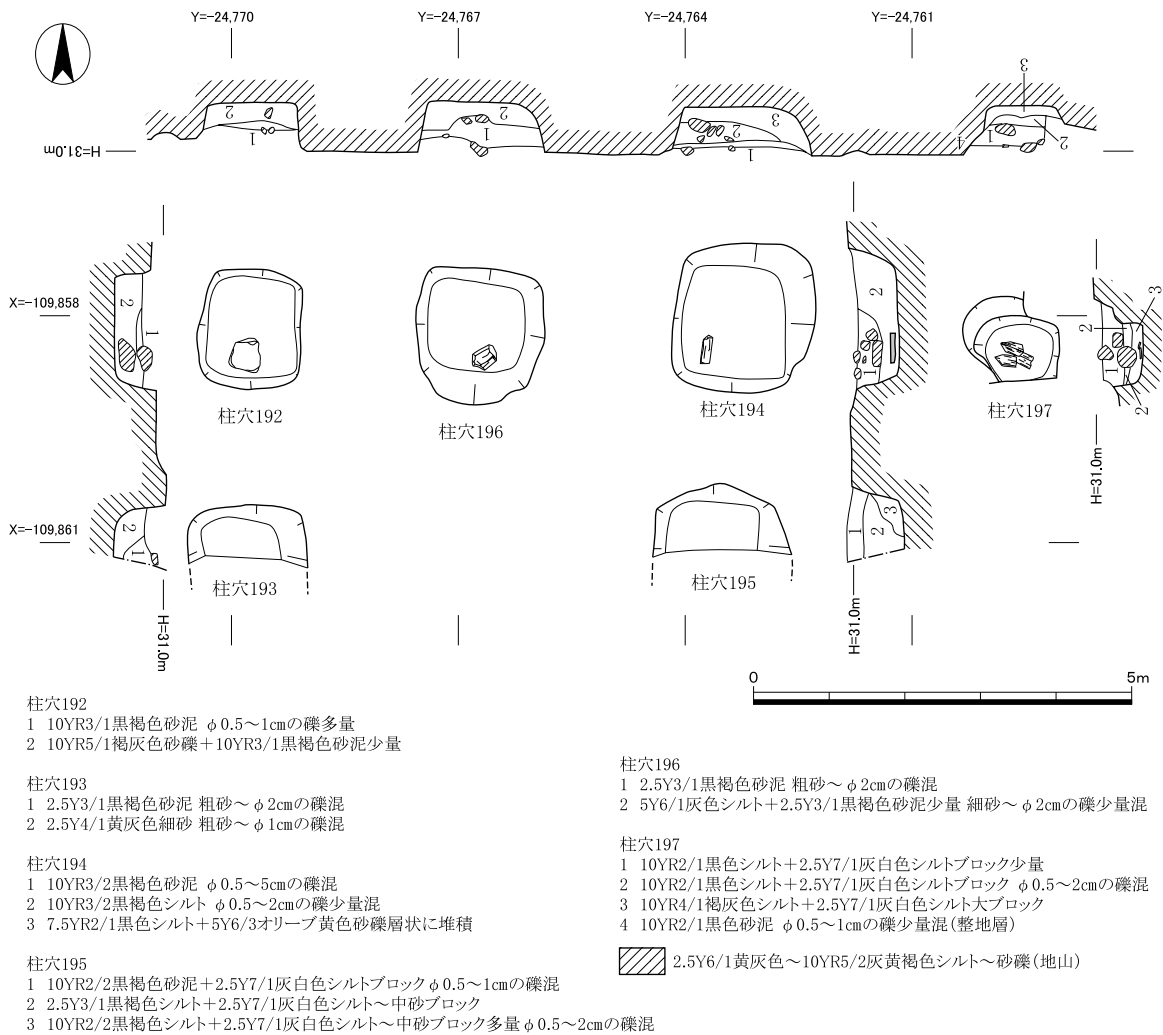
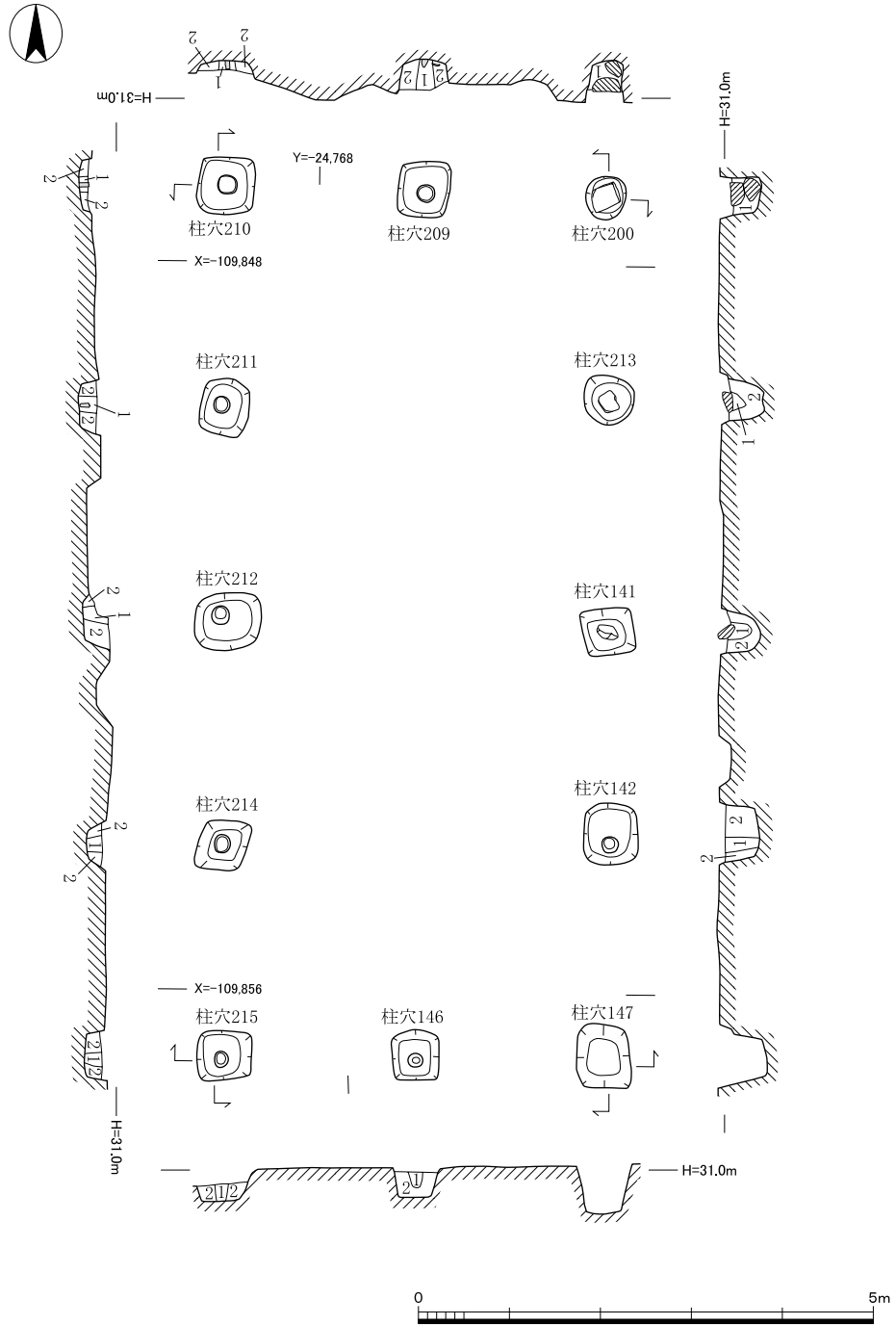


図12 建物2実測図(1:100)

築地1 (図版6、図14) 調査区西端で検出した。この箇所のみ地山が南北方向に高まりとして遺存していた。地山上面で2基1対の柱穴を3箇所検出した。柱穴の東西間は1.0m、南北間は北から6.4m、5.8mある。西側は溝120に削平を受ける。築地敷設時の添柱の柱穴と考えられる。築地芯は宇多小路東築地推定芯から西へ約1.6mの地点に位置する。

溝10 (図版6、図15~17) 調査区北端で検出した東西方向を示す溝である。姉小路南築地の内溝相当位置にあたり、東西は調査区外に延びる。断面形はU字形で、長さ59.4m以上、幅0.68~1.74m、深さ0.1~0.35mある。底面は西に向かって傾斜する。建物1の東側は幅が拡がり、底面に護岸のための杭が13.0mにわたって遺存する。杭の残存長は9~46cmある。大きな部材の一部を切り分けて作ったもので平面形は方形を呈する。杭先は削りの加工が施されている。材は杭26本のうち22本はスギ、4本はケヤキである。建物1の北側では雨落溝として機能しており、西側は築地の下を潜って西行する。埋土は黒褐色砂泥で、I~II期の遺物が出土した。

溝75 溝10の北側で検出した東西方向を示す溝で、溝10とほぼ平行する。断面形はU字形で、長さ22.6m、幅0.7~0.98m、深さ0.1~0.2mである。底部は西に向かって傾斜する。長さは建物1の東西長にほぼ一致する。埋土は黒褐色砂泥に褐色砂泥が混じる。I~II期の遺物が出土した。



- 柱穴210
 1 10YR3/1黒褐色シルト
 2 10YR3/1黒褐色砂泥+2.5Y5/4黄褐色砂泥
- 柱穴211
 1 10YR3/1黒褐色シルト
 2 10YR3/1黒褐色砂泥 φ1~3cmの礫混
- 柱穴212
 1 10YR2/2黒褐色砂泥 φ0.5~1cmの礫混
 2 10YR3/1黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫混
- 柱穴214
 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥 粗砂~φ0.5cmの礫混
 2 10YR3/1黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫混

- 柱穴215
 1 10YR2/2黒褐色砂泥 粗砂~φ1cmの礫混
 2 10YR3/1黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫混
- 柱穴209
 1 7.5Y3/1黒褐色砂泥
 2 10YR3/1黒褐色砂泥 粗砂~φ1cmの礫少量混
- 柱穴146
 1 10YR4/2灰黄褐色砂泥
 2 10YR3/2黒褐色砂泥 φ0.5~3cmの礫少量混
- 柱穴200
 1 10YR3/2黒褐色砂泥

- 柱穴213
 1 5Y3/2オリーブ黒色シルト
 2 10YR3/2黒褐色砂泥
- 柱穴141
 1 2.5Y3/2黒褐色シルト
 2 10YR3/2黒褐色砂泥+10YR4/4褐色砂泥少量 φ0.5~2cmの礫少量混
- 柱穴142
 1 2.5Y3/1黒褐色砂泥
 2 10YR3/1黒褐色砂泥
- 2.5Y6/1黄灰色砂礫(地山)

図13 建物3実測図 (1:80)

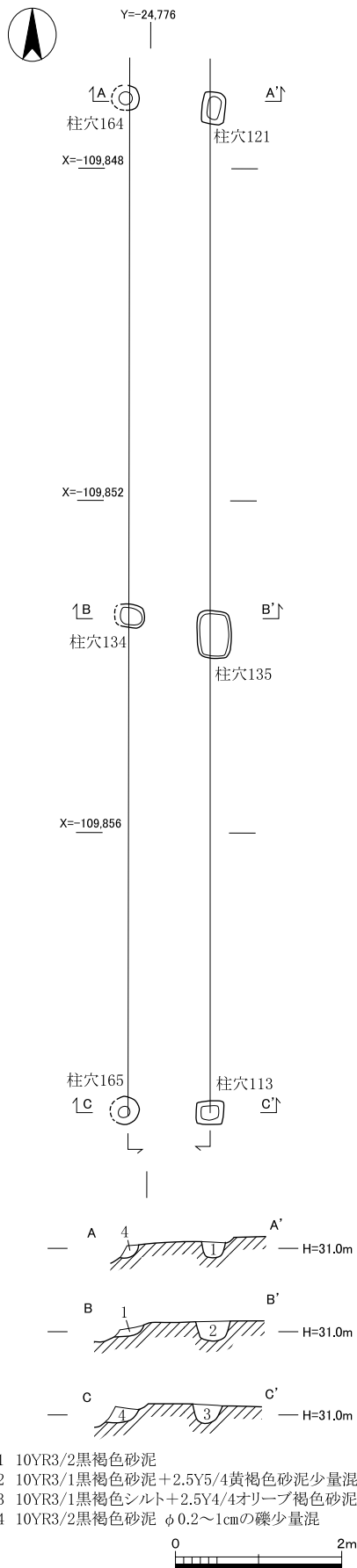


図14 築地1 柱穴実測図 (1 : 80)

溝155 (図16・17) 溝75の西側で検出した東西方向を示す溝で、溝10とほぼ平行に位置する。断面形は浅い皿形で、長さ23.4m、幅0.7～0.98m、深さ0.1～0.2mある。底面は西に向けて傾斜する。東端は攪乱を受け、西は西行して調査区外に延長する。埋土は黒褐色砂泥で、I～II期の遺物が出土した。

溝152 (図版6、図17) 調査区西側で検出した南北方向を示す溝である。宇多小路東築地の内溝にあたり、北側は溝10に接続し、南側は調査区外に延びる。開削後、南半は埋め立て、新たに溝205を敷設する。断面形は逆台形で、長さ11.0m以上、幅2.8～4.2m、深さ0.2～0.27mある。底部は北に向けてわずかに傾斜する。埋土は上層は黒褐色砂泥、下層は暗灰黄色シルトが堆積し、流水の状態を示す。I～II期の遺物がまとまって出土した。

溝150 調査区西側で検出した南北方向を示す溝で、建物3の西側に位置し、柱筋に並行することから建物3の雨落溝と考える。北側は溝10に接続し、南側は攪乱により削平される。断面形は浅い皿形で、幅0.3m、深さ約0.1mである。埋土は黒褐色砂泥である。

溝205 (図17) 溝152南半で検出した南北方向の溝で、溝152を埋め立てて造作した溝である。建物2の西側に位置し、柱筋に並行することから雨落溝であると考え。北側は溝152に接続し、南側は調査区外に延びる。断面形はU字形で、長さ7.0m以上、幅0.42～0.5m、深さ約0.15mある。底部は北に向かってわずかに傾斜する。埋土は黒褐色シルトで、底面に細かい砂礫層が堆積する。I～II期の遺物が出土した。

溝208 (図17) 調査区南西部で検出した南北方向を示す溝で北側・南側は攪乱により削平される。

整地166 調査区北西部で検出した不定形に広がった窪地を整地した遺構である。整地を施した後に溝10を開削していたことを確認した。

石敷153 調査区北西部、整地166西端から溝10にかけて検出した遺構で、溝10を埋めて周辺に礫を敷き詰め整地したものと考え。I期の遺物が出土した。

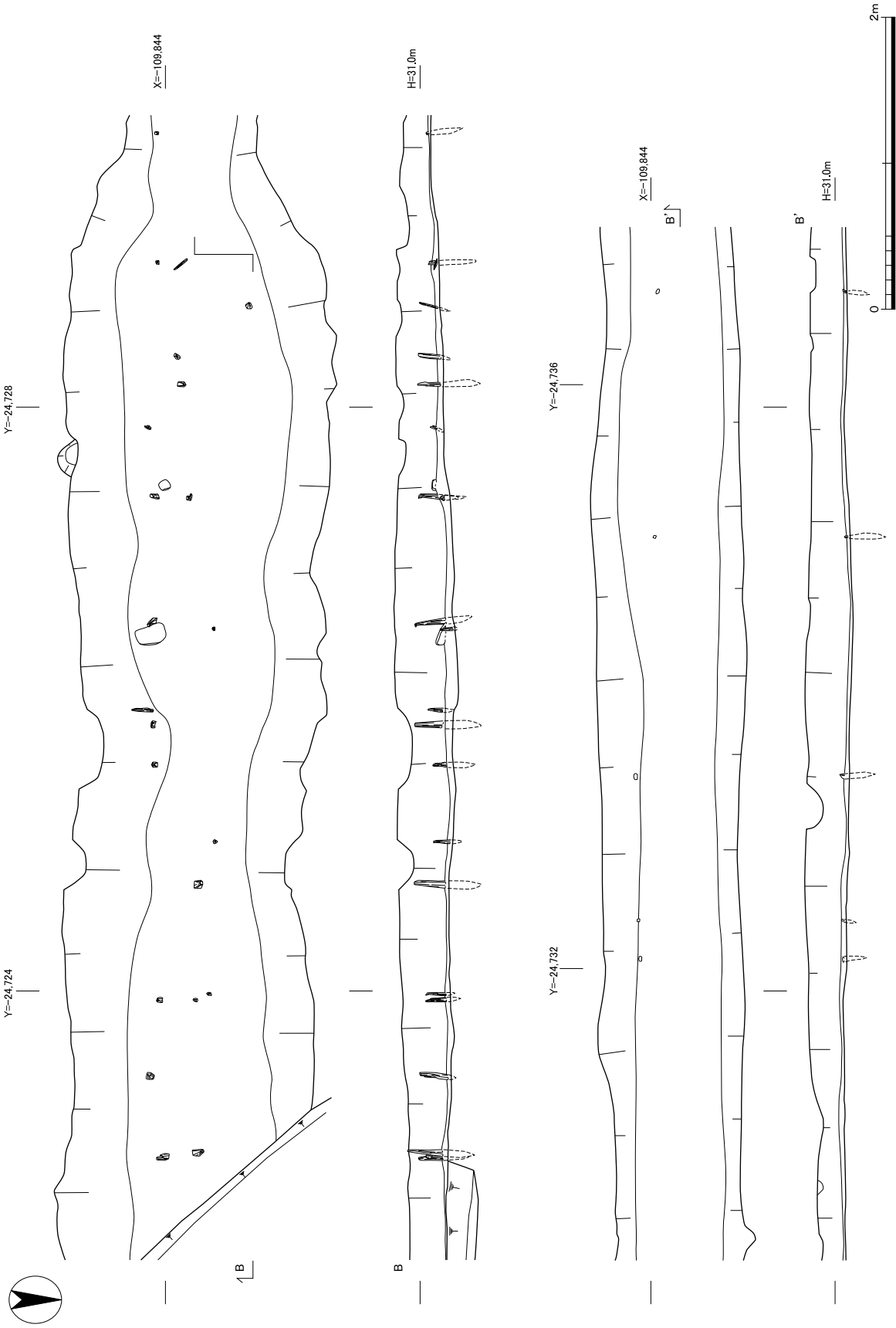


图15 溝10杭列実測図 (1 : 50)

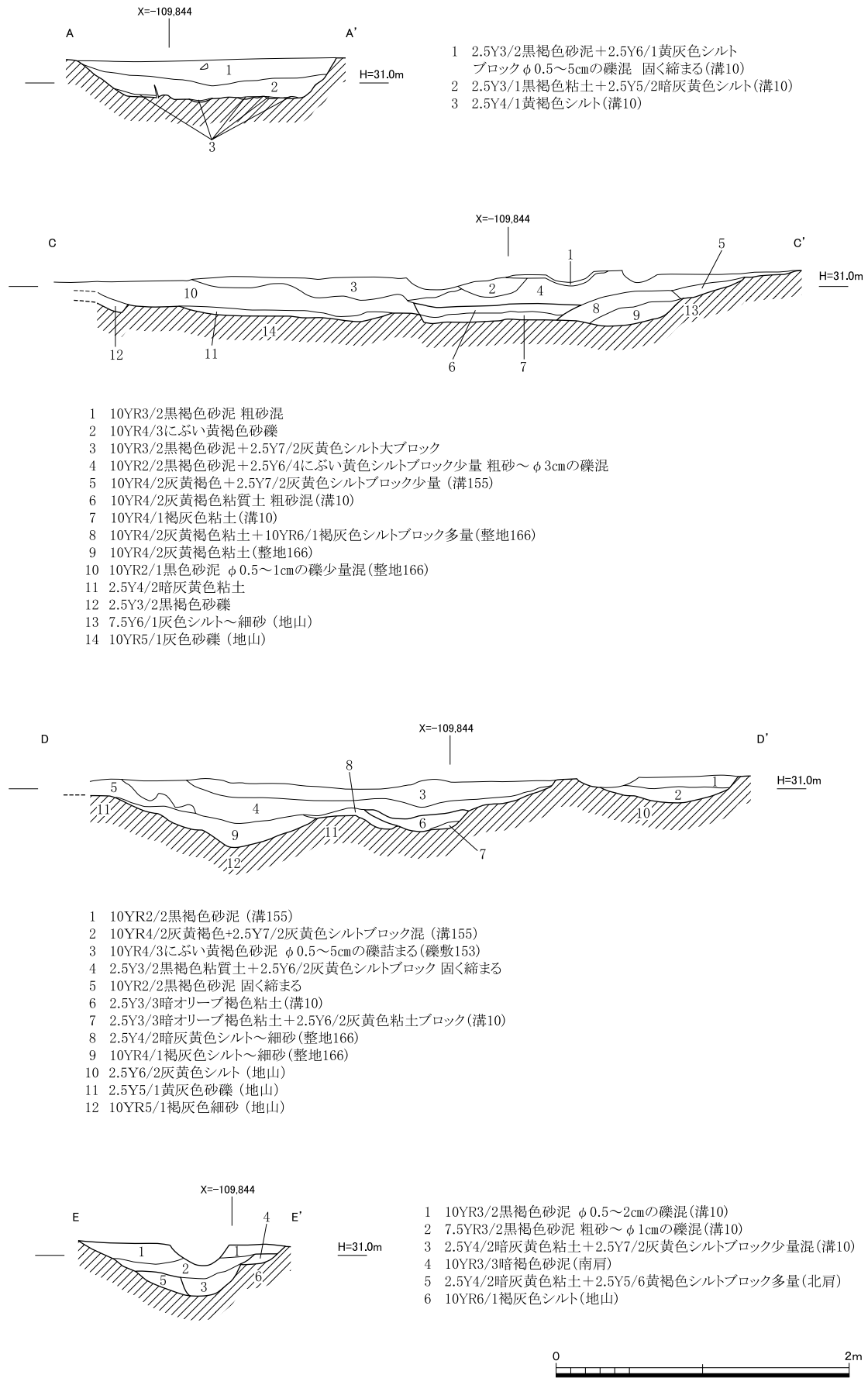
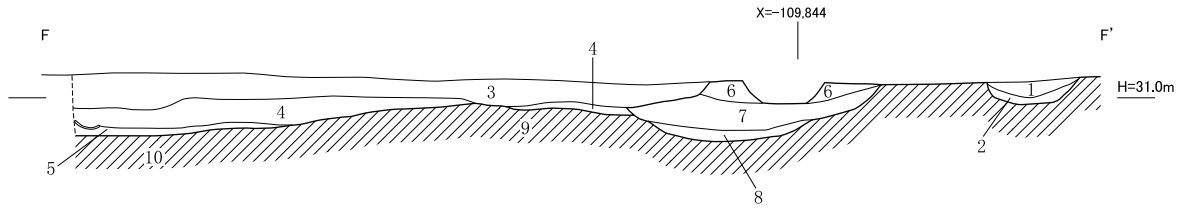
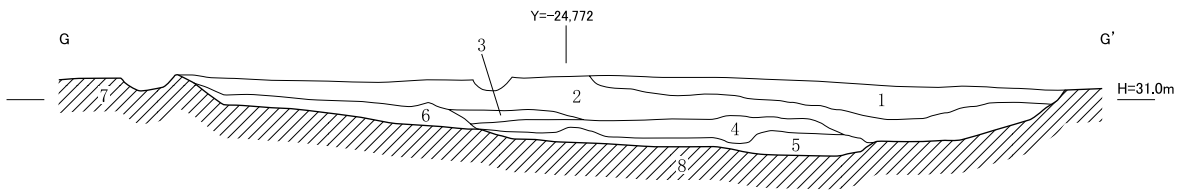


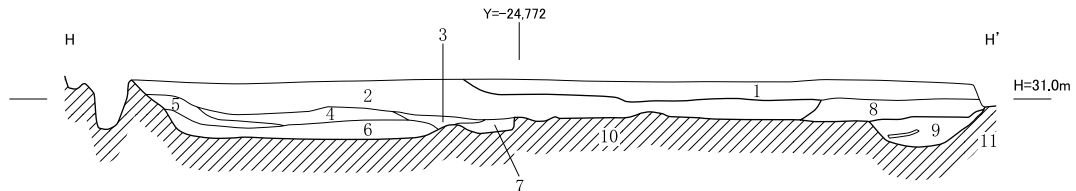
図16 溝10・155断面図 (1 : 50)



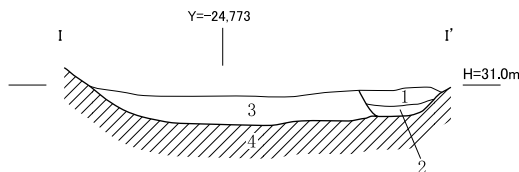
- 1 10YR2/2黒褐色砂泥 (φ 0.5~2cmの礫混)+7.5Y6/1灰色シルトブロック少量混 (溝155)
- 2 10YR4/1褐灰色砂泥 (溝155)
- 3 10YR3/2黒褐色砂泥 φ 0.5~3cmの礫混 固く締まる (溝152)
- 4 10YR3/1黒褐色シルト φ 0.5~1cmの礫少量混 (溝152)
- 5 10YR4/1褐灰色シルト (溝152)
- 6 10YR3/6黒褐色砂泥 (溝10)
- 7 10YR3/1黒褐色砂質土 φ 3cmの礫混 (溝10)
- 8 10YR3/1黒褐色シルト (溝10)
- 9 10YR5/1黄灰色砂礫 (地山)
- 10 5Y6/1灰色シルト (地山)



- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 φ 1~2cmの礫混 (溝152)
- 2 10YR3/2黒褐色砂泥+2.5Y6/2灰黄色粘土ブロック少量 φ 0.5~3cmの礫混 (溝152)
- 3 10YR3/1黒褐色シルト φ 0.5~1cmの礫少量混 (溝152)
- 4 10YR4/1褐灰色シルト (溝152)
- 5 2.5Y4/1黄灰色シルト (溝152)
- 6 2.5Y2/1黒色シルト (溝152)
- 7 2.5Y5/1黄灰色砂礫 (地山)
- 8 5Y6/1灰色シルト (地山)



- 1 10YR3/1黒褐色砂泥 φ 1~2cmの礫混 (溝152)
- 2 10YR2/3黒褐色砂泥 粗砂~φ 3cmの礫多量混 (溝152)
- 3 2.5Y3/2黒褐色砂泥 粗砂~φ 2cmの礫少量混 (溝152)
- 4 10YR2/2黒褐色シルト+10YR6/1褐灰色シルト小ブロック少量 (溝152)
- 5 2.5Y4/2暗灰黄色シルト (溝152)
- 6 2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y6/3にぶい黄色粘土小ブロック (溝152)
- 7 2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y6/3にぶい黄色シルト 粗砂~φ 2cmの礫混 固く締まる (溝152)
- 8 10YR2/2黒褐色シルト 粗砂~φ 1cmの礫少量混
- 9 10YR4/1褐灰色シルト 粗砂~φ 1cmの礫混 (溝208)
- 10 2.5Y6/4にぶい黄色シルト (地山)
- 11 5Y6/1灰色砂礫 (地山)



- 1 2.5Y3/2黒褐色砂質土 細砂~φ 3cmの礫多量混 (溝205)
- 2 2.5Y3/2黒褐色シルト (溝205)
- 3 2.5Y4/2暗灰黄色シルト+2.5Y6/3にぶい黄色シルト 粗砂~φ 2cmの礫混 固く締まる (溝152)
- 4 5Y6/1灰色シルト (地山)



図17 溝10・152・155・205・208断面図 (1 : 40)

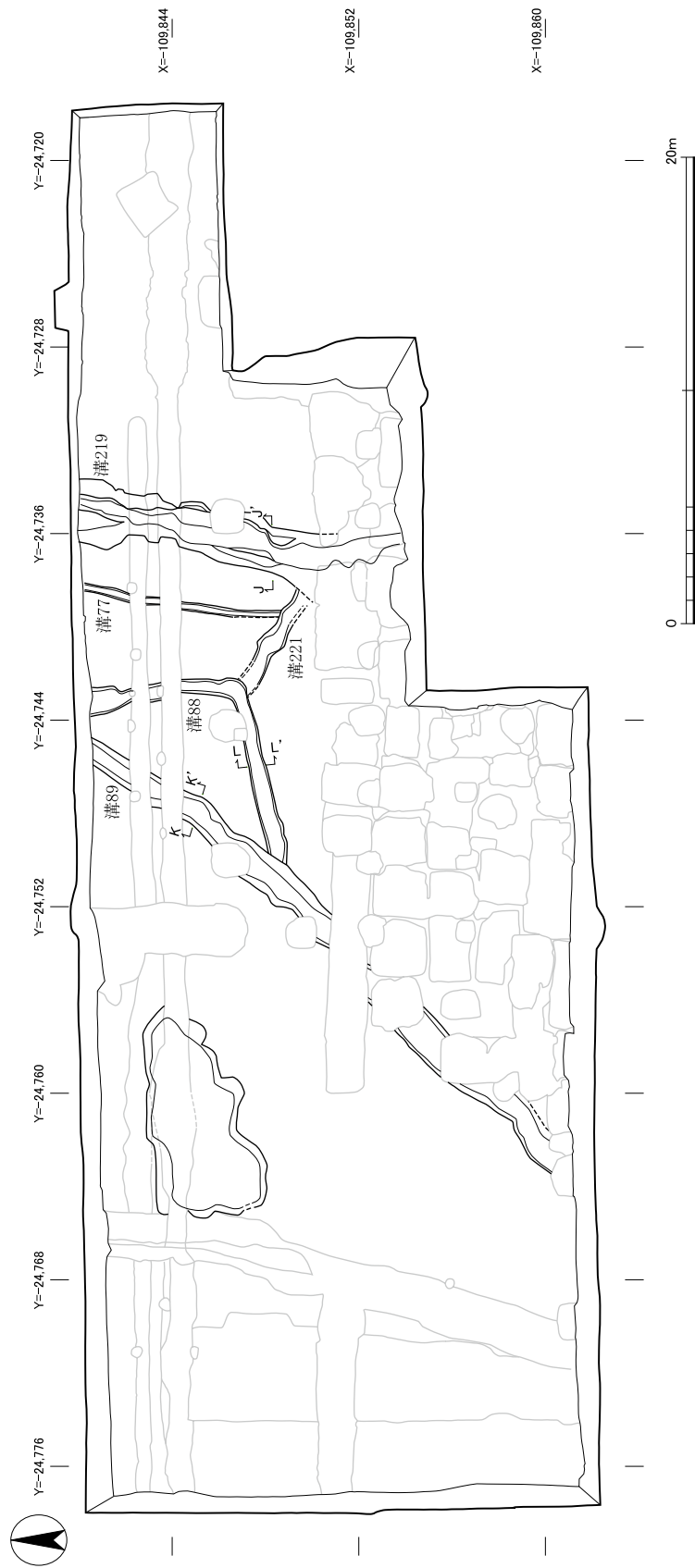


図18 遺構平面図 [古墳時代] (1 : 300)

(5) 古墳時代の遺構 (図18)

検出した溝は5条である。概して調査区中央部付近で検出した。

溝219(図版7、図19) 緩やかに蛇行する南北方向の溝である。北側は調査区外に、南側は土取穴に削平を受けながらも底部は遺存しており、調査区外に延びる。長さ13.8m以上、幅1.9~2.6m、深さ約0.57mある。埋土は黒褐色シルトなどで、底部から中層にかけて流水による堆積層がみられる。古墳時代中期の土師器甕や高杯などが出土した。

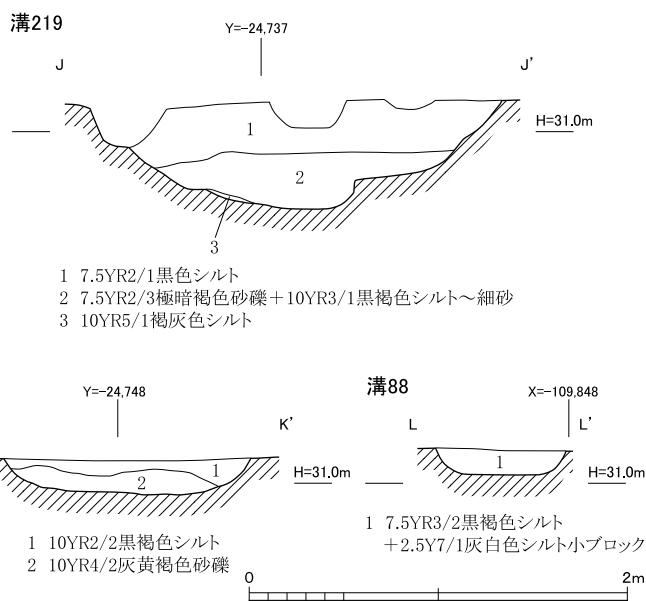


図19 溝88・89・219断面図(1:40)

溝89(図版7、図19) 北東から南西方向を示す溝である。南半は平安時代の遺構や土取穴などの攪乱を受けながらも断続的に延長し、南北側とも調査区外に延びる。断面形は浅い皿形で、長さ26.5m以上、幅約1.3m、深さ約0.14mある。埋土は黒褐色シルトなどで、底部に流水による堆積層がみられる。古墳時代中期の土師器甕が出土した。

溝88(図19) ほぼ南北方向に延長し、後述する溝221付近で西折する溝である。西部は溝89により削平を受ける。断面形は浅い皿形で、長さ13.3m以上、幅0.7~1.06m、深さ0.15mある。平面形状から方形周溝墓の周溝と考えられる。遺物は出土していない。

溝221 溝88の隅部から南東方向に延びる溝で、溝219によって削平を受ける。埋土は黒褐色シルトである。

溝77 わずかに西に振れる南北方向の溝で、溝221付近で途切れる。断面はU字形で長さ8.6m、幅0.34m、深さ0.12mである。埋土は黒褐色シルトなどで、底部にわずかに流水による堆積層がみられる。

註

- 1) 小森俊寛・上村憲章「京都の都市遺跡から出土する土器の編年的研究」『研究紀要』第3号 (財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

4. 遺物

(1) 遺物の概要

今回出土した遺物は、整理箱で69箱ある。出土遺物には土器・瓦・土製品・石製品・金属製品・木製部材・その他植物遺体などがある。出土遺物の大半は土器類が占め、次いで瓦類・木製部材が多く、その他の遺物はわずかである。

時代別の出土量では、古墳時代が約1割、平安時代が約7割、室町時代と江戸時代が約2割である。調査では新しい時代の遺構埋土・包含層により古い時代の遺物が混入しているものがある。

以下、種類ごとに出土遺物の概要を報告する。なお、出土遺物の時期の表記は、平安京・京都I期～XIV期の編年案に準用する。

(2) 土器類

土器類には、土師器・黒色土器・須恵器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦器・焼締陶器・施釉陶器・中国産陶磁器などがある。土器は出土遺物の多くを占めるが、古墳時代、平安時代前期、室町時代、江戸時代に大別することができ、それ以外の時期のものは少ない。

古墳時代（1～15）（図版8、図20）

古墳時代の土器は土師器がある。溝219・89からの出土が大半である。また少量ながら平安時代の柱穴や整地層に混入して出土したものがある。土器は布留式終末期に属する。土師器には壺（1～4）・小型精製壺（5）・ミニチュア丸底壺（6）・甕（7～9）・高杯（11～15）などがある。なお、土師器甕（10）は7世紀前後の飛鳥時代に属する。

1・2は口縁部の破片で体部は欠損する。口縁部が外反して開く二重口縁で、端部は丸くおさめ

表3 遺物概要表

時代	内容	コンテナ箱数	Aランク点数	Bランク箱数	Cランク箱数
古墳時代	土師器		土師器15点		
奈良時代 ～長岡京期	瓦		瓦8点		
平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土製品、金属製品、木製品		土師器82点、黒色土器3点、須恵器24点、緑釉陶器25点、灰釉陶器19点、瓦7点、金属製品2点、土製品2点、木製品9点		
室町時代	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、石製品		土師器3点、須恵器1点、瓦器2点、焼締陶器1点、施釉陶器1点、輸入磁器1点、石製品3点		
江戸時代以降	焼締陶器、施釉陶器、磁器、銭貨				
合計		80箱	208点（15箱）	1箱	64箱

※ コンテナ箱数の合計は、整理後、Aランクの遺物を抽出したため、出土時より11箱多くなっている。

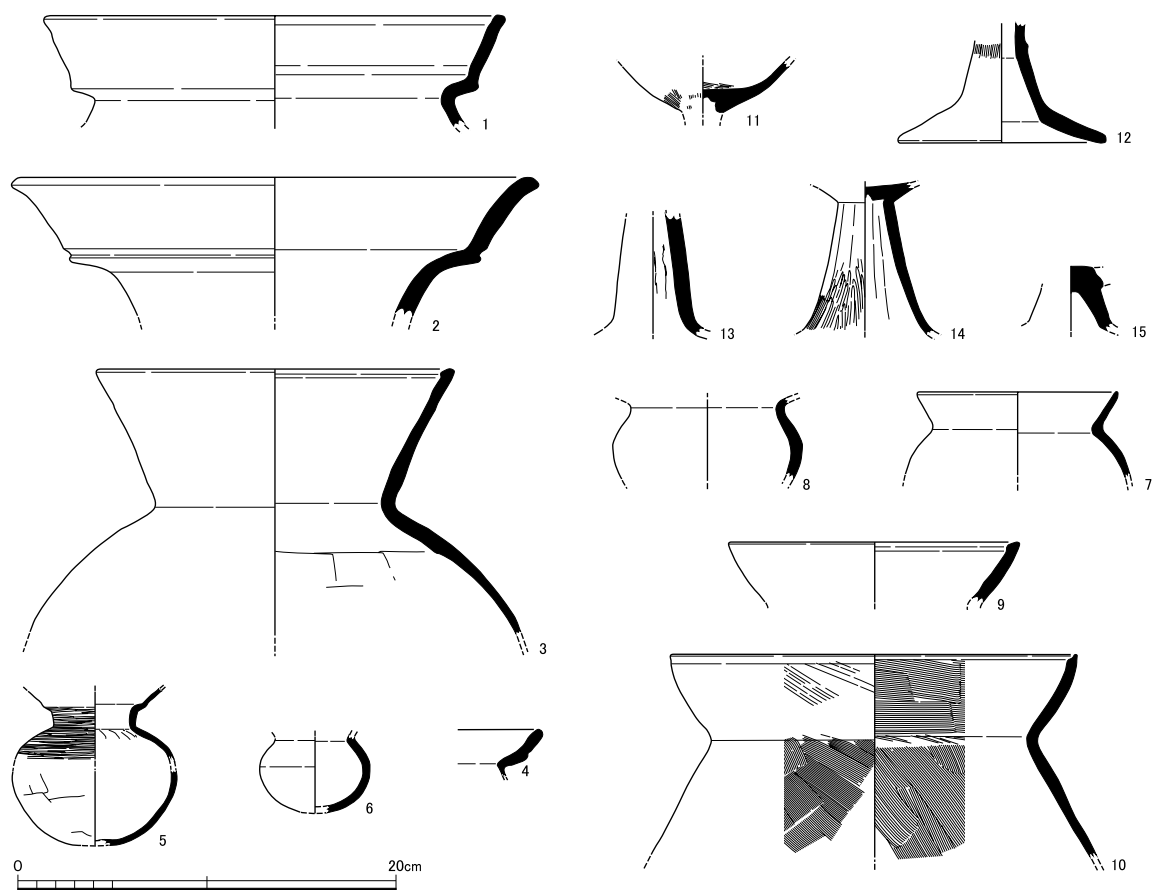


図20 土器実測図1 (1:4)

るものと、短く外反するものがある。調整は口縁部内外面は横ナデである。3は口縁部が体部から屈曲して直線的に開き、端部は内側に肥厚する。口縁部内外面は横ナデで、体部内面上半に横方向のケズリを行う。外面は磨滅し調整不明。4は口縁部のみの小片である。口縁部はわずかに外反して開く二重口縁で、端部は丸くおさめる。5は丸底で、肩の張る体部から口縁部が立ち上がり、外反して開く二重口縁である。端部は欠損する。調整は口縁部・体部内面は横ナデ、口縁部外面から肩部は横方向のミガキ。体部下半はわずかにケズリが認められる丁寧な作りである。6は丸底壺である。口縁部は欠損する。調整は肩部内外面横ナデ。体部下半は多方向のナデ、外面はオサエである。甕はいずれも口縁部が「く」字状に屈曲して開く。7は口縁部が直線的に開き、端部は丸くおさめる。調整は口縁部・肩部の内外面は横ナデである。8は体部上半のみ残存で、調整は外面にハケメの痕跡があり、内面は横ナデ。9は口縁部がやや内弯気味に立ち上がり、端部は内側に肥厚する。調整は内外面横ナデ。10は口縁部が内湾して開き、端部は内側に内傾する面をもつ。口縁部・体部内外面にハケメを施す。高杯には杯部の11と脚部の12～15がある。脚部はいずれも中空である。11の底部外面は脚部接合箇所に細い棒状工具を突き刺した痕跡が残る。調整は内面はナデ、外面はハケメを施す。12は裾部が屈曲して開く。調整は脚部外面はケズリ、杯接合部はハケメ、内面は横ナデ。裾部外面は横ナデ、内面はオサエである。13～15は裾部が欠損する。13は外面が磨滅で詳細不明であるが内面にはしぼり目が残る。14は外面にケズリのちミガキ。内面はしぼり目が残る。15は器高が低く脚部に杯の接合痕がある。裾部は欠損する。調整は磨滅で不明。1・4・7～

9・11～15は溝219、3・5・6は溝89、2は整地層、10は建物1柱穴187から出土した。

平安時代前期（16～168）（図版8～10、図21～24）

土師器皿・椀・杯・高杯・甕、黒色土器甕・椀・杯、須恵器杯・杯蓋・鉢・壺・甕、緑釉陶器皿・椀・壺、灰釉陶器皿・段皿・椀・壺・壺蓋などがある。溝152・溝10・柱穴・整地からなどのほか、室町時代の耕作溝・耕作土、江戸時代の土取穴などに混入して出土した。

溝152（16～97）（図版8～10、図21・22）出土土器は上・中・下の3層に分け図示した。時期はⅠ期からⅡ期に収まる。上層からの出土が大半で、特に土師器が多い。

上層出土の土器には、土師器皿（16～31）・椀（32～34）・杯（35～45）・高杯（46）・甕（47・48）、黒色土器甕（49）、須恵器杯（50）・杯蓋（51）・壺（52・53）・鉢（54）、灰釉陶器椀（55～59）・耳皿（60）・皿（61）・段皿（62）・盤脚部（63）、緑釉陶器椀（64～67）などがある。

16～31は平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、外上方に開く口縁部をもつものと、外反気味に開くものがある。端部は内側に肥厚するもの、丸くおさめるものがある。20・25はつまみ上げる端部をもつ。調整は16～20は外面はケズリ、内面はナデ。21～31は外面下半がオサエ後ナデ、内面はナデである。25は河内産の土師器で口縁端部は短く外反する。32～34は丸味を帯びた底部から体部が緩やかに内弯して開き、口縁端部はわずかに肥厚するか、丸くおさめる。調整は外面ケズリ、内面はナデを施す。35～39は高台のない杯、40～45は高台を貼り付ける杯である。ともに平らな底部から口縁部は内弯気味に開き、口縁端部はわずかに屈曲して、丸くおさめる。調整は35～39は体部・口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで、内面はナデである。40～44は口縁部内外面は横ナデ、体部外面はケズリ、底部内外面はナデである。46の杯部は扁平に開き、口縁部は外反し水平に広がる。口縁端部はわずかに凹み、上端が丸く肥厚する。調整は外面はオサエのちケズリ、内面はナデを施す。47・48は体部上半はやや丸みを帯びて内傾し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は47が内側に肥厚し、48はつまみ上げる。49は体部は丸く、口縁部は「く」の字状に開く。端部は丸くおさめる。調整は外面はケズリ、内面はハケメを施す。内面は黒色を呈する。50は底部が欠損する。貼り付け高台である。体部はわずかに開いて立ち上がり口縁部に至る。端部は丸くおさめる。調整は体部内外面は横ナデ調整。51はつまみが欠損する。天井部は平坦で、口縁部は屈曲し、端部は下方へ突き出す。天井部外面はヘラオコシ、内面は横ナデ調整。52は口縁部が欠損する。底部は平坦である。体部は卵形を呈する。内面は回転ナデ痕を強く残す。53は平坦な底部から大きく内弯する体部をもつ。ともに内外面とも横ナデ、底部外面には糸切り痕が残る。54は体部を欠損する。口縁部は短く、外反する。端部上端は平坦面をつくる。調整は肩部・口縁部内外面とも横ナデ調整である。55～59は体部が丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。体部外面下方はケズリ後横ナデ、内面は横ナデ調整で、内面のみ施釉。55・56・59は貼付高台である。55の高台内に「十」と考えられる墨書がある。60は口縁の一部を除き欠損する。口縁部は内側へ折り曲げ、端部を波打たせる。61は体部が外へ開く。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。貼付高台である。体部外面はケズリ、内面は横ナデ調整で、内面のみ施釉する。62は広縁の段皿で、外面にも段が付く。底部には獣足が付く。体部下半外面は

溝152上層

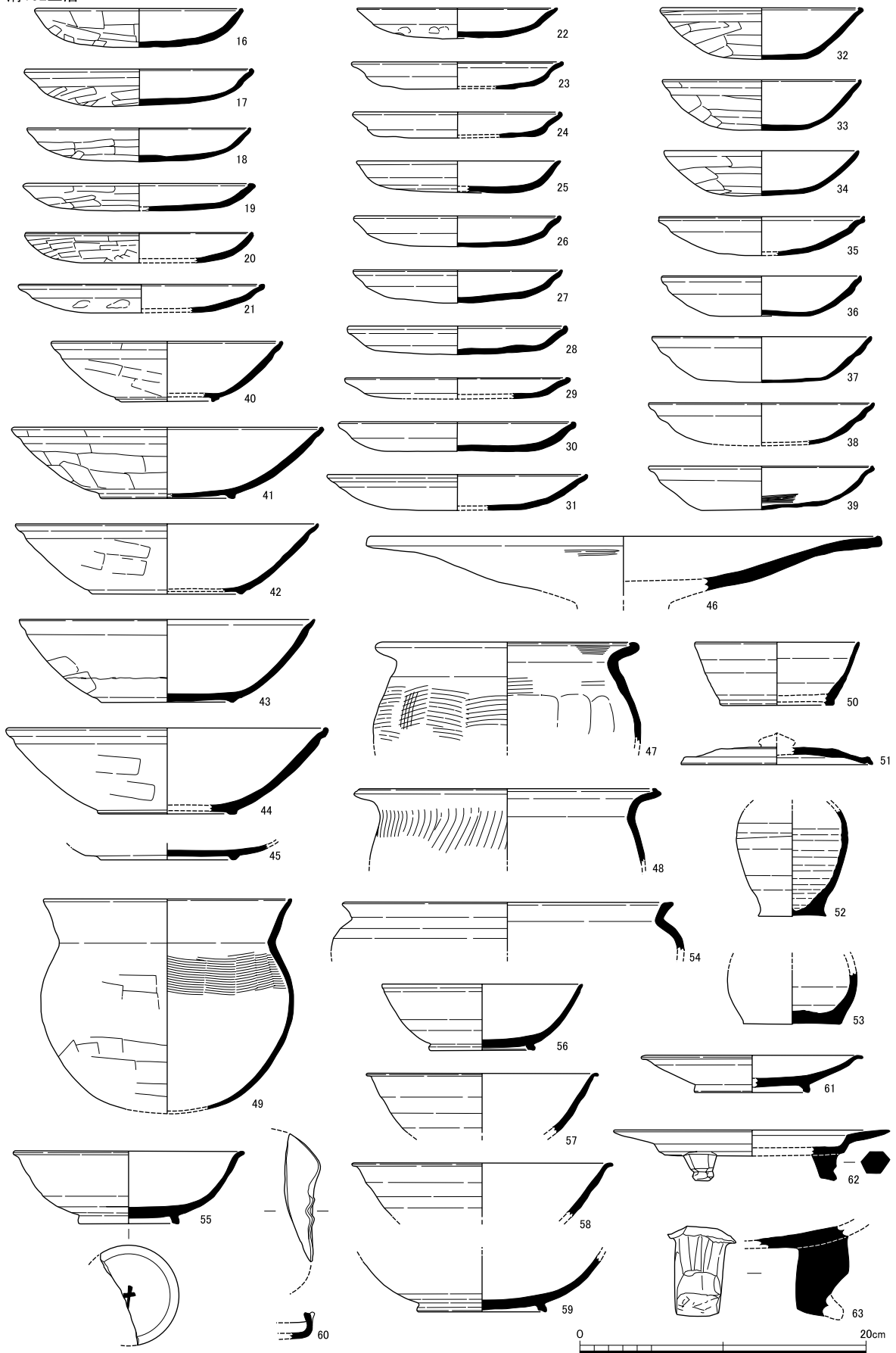
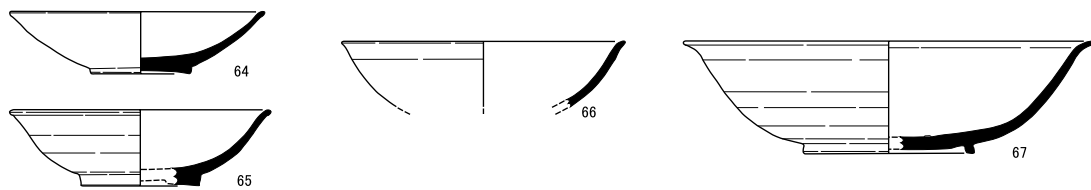
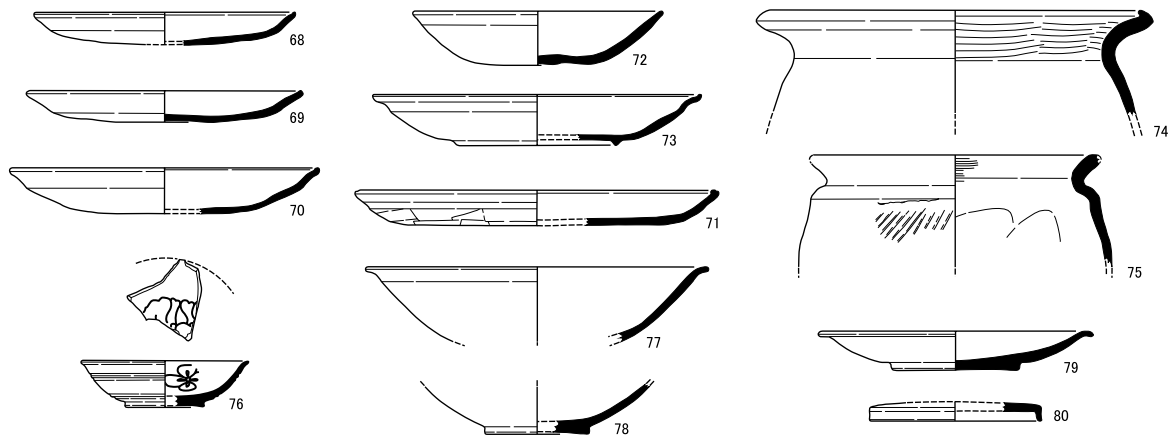


图21 土器実測図2 (1:4)

溝152上層



溝152中層



溝152下層

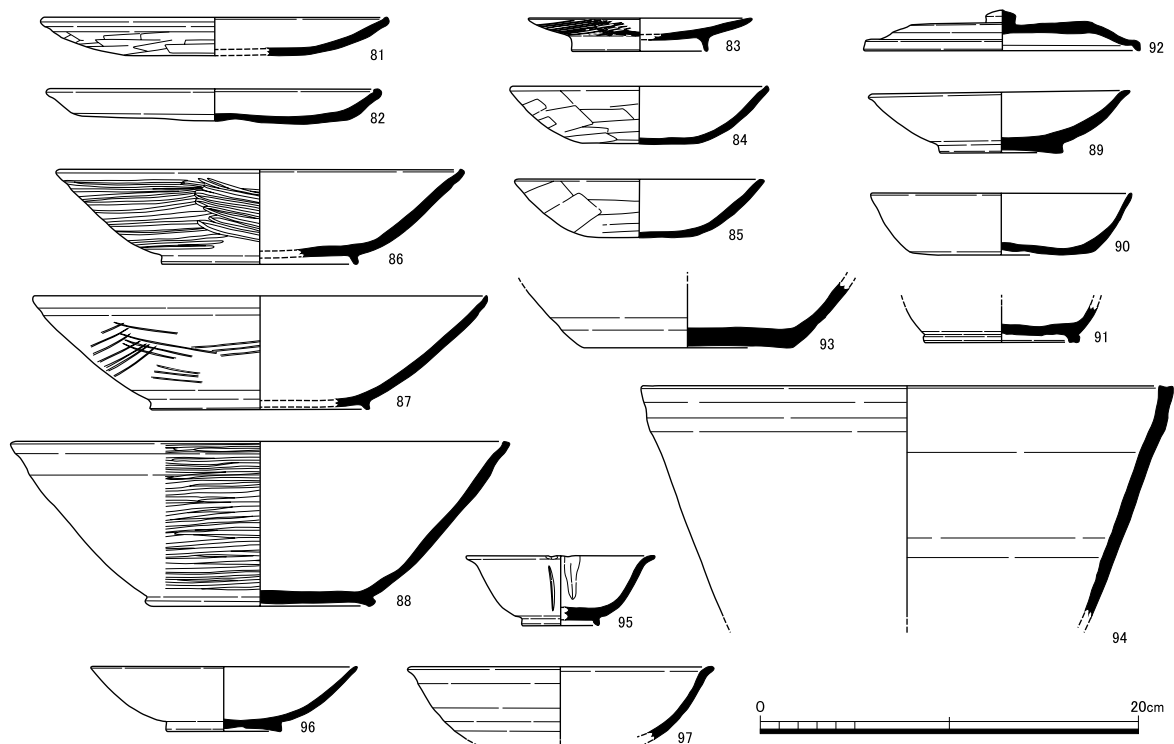


図22 土器実測図3 (1:4)

ケズリ、他は横ナデ調整で、獣足は面取りを施した丁寧な作りである。内面のみ施釉する。63は盤の脚部である。面取りを施した足で、盤の底部内面と獣足の外面に釉を施す。64～67は体部が丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。64は全面をミガキ、高台は削り出しの平高台である。ハケで全面に施釉する。山城産。65は横ナデ調整で、高台は削り出し、全面にハケで施釉する。山城産。66は底部が欠損する。全面をミガキ、ハケで全面に施

釉する。山城産。67は大型碗で、貼付高台である。体部・口縁部外面はケズリ後ミガキ、内面は丁寧なミガキで、ハケで全面施釉する。猿投産。

中層出土の土器には、土師器皿（68～71）・杯（72・73）・甕（74・75）、緑釉陶器碗（76～78）・皿（79）、灰釉陶器蓋（80）がある。

68～71は平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、外反気味に開く口縁部をもつ。口縁端部は内に巻き込むように肥厚するものや、つまみ上げるものがある。調整は71は外面はケズリ、内面はナデ。68～70は外面オサエ後ナデ、内面はナデである。72は高台のない杯で、平らな底部から体部は外上方に開き、口縁端部は丸くおさめる。73は高台を貼り付ける杯で、平らな底部から体部は外方に開き、口縁部はわずかに屈曲して、端部はつまみ上げる。調整は体部・口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで、内面はナデである。74・75は体部上段はやや内傾し、口縁部は「く」の字状に外反する。74の口縁端部は内側に肥厚する。調整は体部外面はオサエ後ハケメ調整、口縁部外面はナデ調整、内面はハケメを施す。75は肩部で、粘土を継ぎ足して口縁を形成する。粗雑な作りである。口縁端部は丸くおさめる。調整は体部外面はオサエ後タタキ、口縁部内外面はナデ調整を施す。76は小振りの碗で、丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。削出高台である。体部外面に2条のタガが付き、底部と体部内面に陰刻花文を施す。全面ミガキで、ハケで全面に施釉する。仏器として使用されたものと考えられる。猿投産である。77はやや大振りの碗で、丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。底部は欠損する。外面はケズリ後ミガキ、内面はミガキを施す。山城産。78は削出高台である。全面ミガキで、ハケで全面に施釉する。山城産。79は体部は大きく開き、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。削出高台である。全面ミガキで、ハケで全面に施釉する。山城産。80は天井部は平坦で、口縁部は短く垂下し、端部は丸くおさめる。ナデ調整で、上面のみ施釉。

下層出土の土器には、土師器皿（81～83）・碗（84・85）・杯（86～88）、須恵器碗（89）・杯（90・91）・杯蓋（92）・鉢（93・94）、緑釉陶器碗（95・96）、灰釉陶器碗（97）がある。

81は平坦な底から上方に開き、端部はつまみ上げる。調整は体部外面はケズリ、口縁部外面と内面はナデ。82は平坦な底部から口縁部が外上方に短く立ち上がる。口縁端部は内側に肥厚する。調整は外面オサエ後ナデ、内面はナデである。83は高台を貼り付けた皿で、調整は底部と体部外面はミガキ、内面はナデ。丁寧な作りである。84・85は丸味を帯びた底部から口縁部が緩やかに内弯して開き、端部は丸くおさめる。調整は外面ケズリ、内面はナデを施す。86～88は高台を貼り付ける杯である。ともに平らな底部から体部が内弯気味に開き、口縁部はわずかに屈曲して、端部は肥厚する。調整は体部・口縁部外面はミガキ、底部外面はオサエで、内面はナデである。86の内面全面に黒漆を塗布している。89は体部は外傾して開き、口縁部が短く外反する。端部は丸くおさめる。削出高台で、底部外面は糸切り痕が残る。調整は内外面とも横ナデ。90は平底で体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。調整は磨滅により不明。91は底部の破片のみで、口縁部は欠損する。貼付高台で、底部外面はヘラオコシ、内面はナデ調整である。92は天井部は平坦で、中央部にツマミが付く。口縁部は屈曲し、端部は下方へ突出する。天井部外面はヘラオコシ、内面はナデ

を施す。93は平底で体部は大きく開き、上部が欠損する。底部外面は糸切り痕が残る。94は体部は大きく開き、口縁部は内側にわずかに立ち上る。端部上端は面を有し中央は凹む。調整は体部内外面はナデ。95は小振りの輪花椀である。体部は丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。口縁部と体部中部をヘラで外方より軽く押さえて輪花を作る。丁寧な作りである。全面をミガキ、高台は削り出しで、ハケで全面に施釉する。猿投産。96は体部は丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁端部は丸くおさめる。削り出しの蛇の目高台である。全面をミガキ、ハケで全面に施釉する。山城産。97は体部は丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。底部は欠損する。内外面ナデで、内面のみに施釉する。山城産。

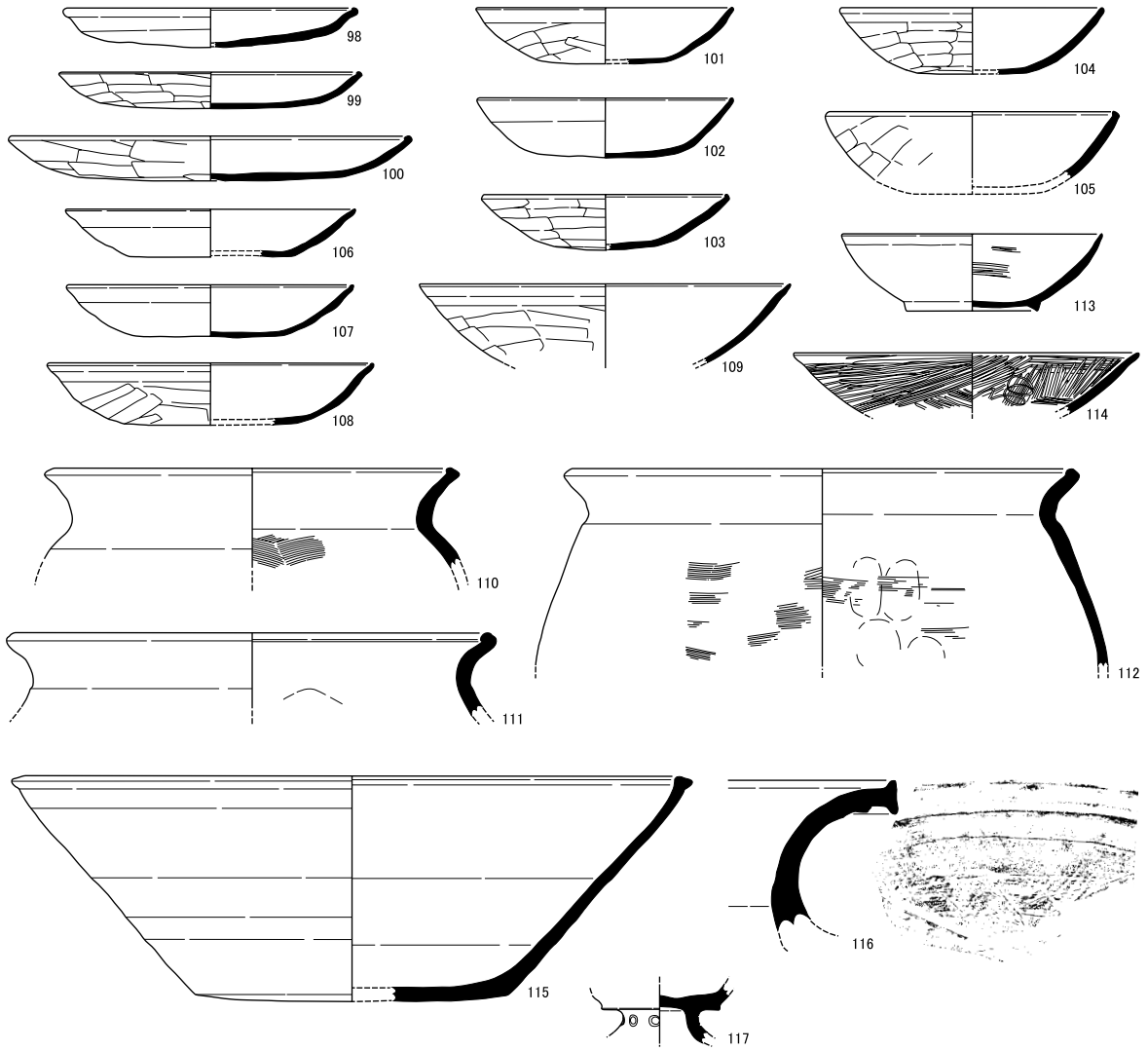
溝10(98～133)(図版10、図23) 出土土器は上・下の2層に分けて図示した。時期はI期からII期に収まる。

上層出土の土器には、土師器皿(98～100)・椀(101～105)・杯(106～109)・甕(110～112)、黒色土器椀(113)・杯(114)、須恵器鉢(115)・甕(116)、緑釉陶器椀壺(117)などがある。

98は口縁部が外反気味に開く。99・100は平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、外上方に開く口縁部をもつ。ともに端部は内側に肥厚する。調整は98は外面オサエ後ナデ、内面はナデ調整である。99・100の調整は外面ケズリ、内面はナデ。101～105は丸味を帯びた底部から体部・口縁部が緩やかに内弯して立ち上がり、101・102・104は口縁端部を丸くおさめ、103・105は端部は内側に肥厚する。102以外は調整は体部外面ケズリ、内面はナデを施す。102の調整は体部外面オサエ後ナデ、内面はナデを施す。106～108は高台のない杯である。ともに平らな底部から体部は内弯気味に開き、口縁部はわずかに屈曲して端部は丸くおさめる。109は底部が欠損する。調整は106・107は体部・口縁部内外面は横ナデ、底部外面はオサエで、内面はナデである。108・109は口縁部内外面は横ナデ、体部外面はケズリ、底部内外面はナデである。110～112は体部上段はやや内傾し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は内側に肥厚する。調整は110は体部・口縁部外面はオサエ、口縁部内面はナデ調整、体部内面はハケメを施す。111は口縁部内外面ナデ、112は体部外面オサエ後ハケメ、内面オサエ後ナデ、口縁部内外面ナデ調整を施す。113は丸味を帯びた底部から体部・口縁部が緩やかに内弯して開き、口縁端部を丸くおさめる。貼付高台で、内面は黒色を呈する。体部外面は磨滅で調整は不明瞭であるが、内面にはミガキの痕跡が残る。114は体部が外上方に開く杯で、底部は欠損する。体部内外面にミガキを施す。内面は黒色を呈する。115は平底で体部は大きく開き、口縁部は内側にわずかに屈曲する。端部は外傾し、わずかに突出する。調整は体部内外面はナデ、底部外面は糸切り痕をナデ消す。116は口縁部が大きく外反し、端部の上下端が突出し、幅広の面をなす。口縁部上方に断面三角形の凸帯を付ける。調整は口縁部外面はナデ後タタキ、内面はナデ。117は壺底部に裾広がりの短い脚を貼り付けて台とする。接合部直下に円形の竹管文を施す。外面ナデで、底部・脚部外面に施釉する。

下層出土の土器には、土師器皿(118～120)・杯(121～123)・壺(124)・杯蓋(125)・高杯(126)、須恵器杯蓋(127)・壺(128)、緑釉陶器皿(129)・椀(130・131)、灰釉陶器椀(132)・

溝10上層



溝10下層

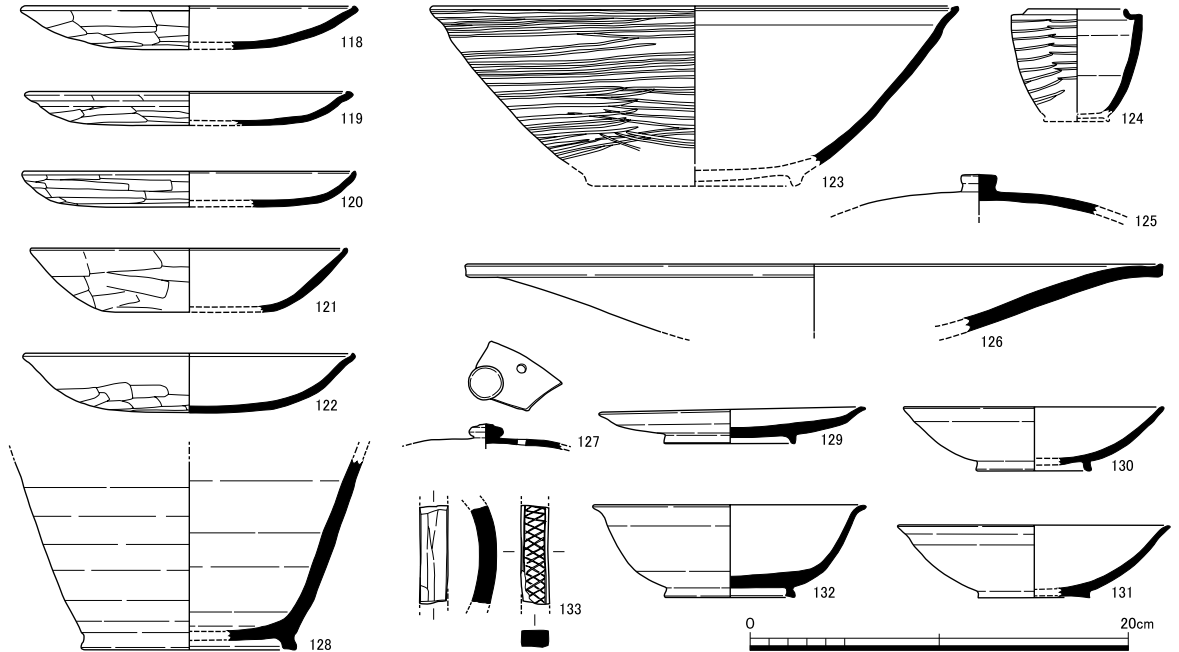


图23 土器実測图4 (1 : 4)

把手(133)などがある。

118～120は平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、外上方に開く口縁部をもつ。119・120は口縁部が外反気味に開く。118・119は端部は内側に肥厚する。120の端部は丸くおさめる。調整はともに外面ケズリ、内面はナデ。121・122は高台のない杯、123は大型で高台が貼り付くタイプの杯であるが底部は欠損する。ともに平らな底部から体部は内弯気味に開き、口縁部はわずかに屈曲して端部は丸くおさめる。調整は121・122は口縁部内外面は横ナデ、体部外面はケズリ、底部内外面はナデである。123の調整は体部・口縁部外面はミガキ、内面は横ナデである。124の体部はやや外傾して立ち短く内側に屈曲する小さな口縁が付く。底部は欠損する。調整は体部・口縁部外面はミガキ、内面はナデ調整を施す。125は丸味を帯びた天井部の中心に円柱形のツマミが付く。口縁は欠損する。表面が磨滅して調整は不明。126は扁平な杯部が口縁部で外反し、ほぼ水平に広がる。口縁端部はわずかに凹み、上端が丸く突き出る。調整は外面はオサエ、内面は横ナデを施す。127はやや丸味をおびた天井部の中央に宝珠形のツマミが付く。ツマミ付近の天井部に穿孔を施す。128は平坦な底部に高台が付く。体部は外上方に高く立ち上がる。体部内外面とも横ナデ、底部外面はナデ調整。内面はロクロナデ調整。129は平らな底部に、口縁部は内側に小さく折れ、外反する。端部は丸くおさめる。貼付高台で、調整は全面ミガキ、ハケで全面に施釉する。丁寧な作りである。猿投産。130・131は体部は丸味をもって開き気味に立ち上がり、131は口縁部は小さく外反し、ともに端部は丸くおさめる。130は貼付高台で、全面をミガキ、ハケで全面に施釉する。山城産。131は削出高台で、全面をミガキ、ハケで全面に施釉する。山城産。132は体部は丸味をもって開き気味に立ち上がり、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。貼付高台である。調整は体部外面下方はケズリ後ナデ、内面はナデ調整で、内面のみ施釉。133は把手の一部で、断面は長方形で、表面に斜め格子の線刻、裏面はケズリを施す。表・裏・側面にハケで施釉する。

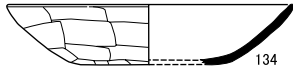
この他、平安時代の遺構から少量であるが出土した土器を図示した。また、その他遺構として、室町時代以降の遺構から混入して出土した土器、室町時代の礫混じりの床土と平安時代整地層を掘り下げた際に出土した土器もここに掲載した。

整地166(134・135)(図版10、図24) 134は土師器碗である。底部から体部・口縁部が外傾して開き、口縁端部を丸くおさめる。調整は体部外面ケズリ、内面はナデを施す。135は須恵器杯である。平底で体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。削出高台で、底部外面・内面はナデ調整である。高台内に「北」の墨書がある。

礫敷153(136・137)(図24) 136は土師器杯で、底部に高台を貼り付ける。口縁部は欠損する。平らな底部から体部は外傾する。体部・口縁部内外面はナデ、底部外面はオサエで、内面はナデである。137は緑釉陶器碗である。底部が欠損する。体部は丸味をもって外上方に開き、口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。調整は全面をミガキ、ハケで全面に施釉する。山城産。

溝152東肩(138・139)(図24) 138は土師器碗である。丸味を帯びた底部から口縁部が外傾し、端部はわずかに屈曲してつまみ上げる。調整は体部外面ケズリ、内面はナデを施す。甕(139)は体部上段はほぼ直立で、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は内側に肥厚する。調整は

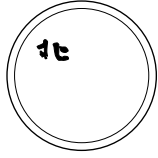
整地166



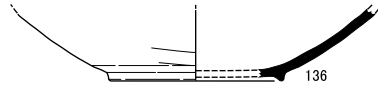
134



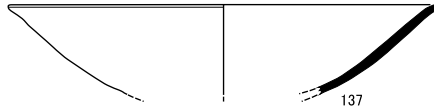
135



礫敷153

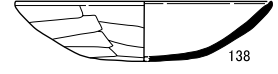


136

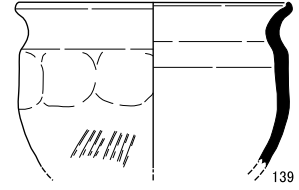


137

溝152東肩

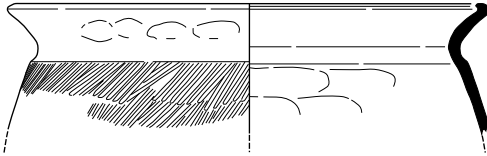


138



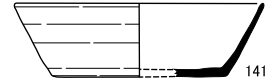
139

溝208



140

土坑156

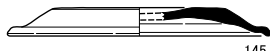


141

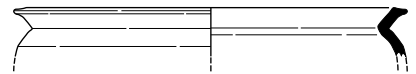
平安時代整地層



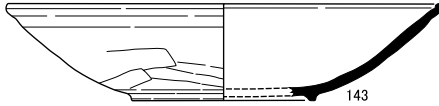
142



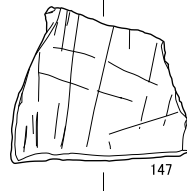
145



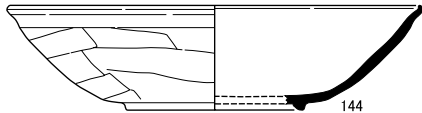
146



143



147



144



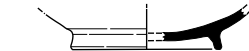
148



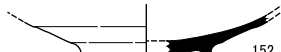
149



150



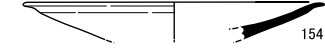
151



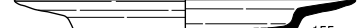
152



153

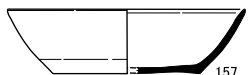


154

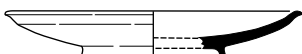


155

その他遺構



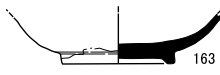
157



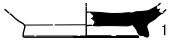
161



162



163



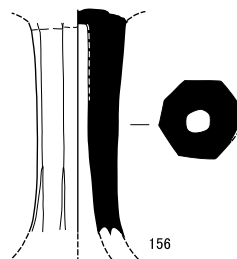
164



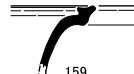
165



166



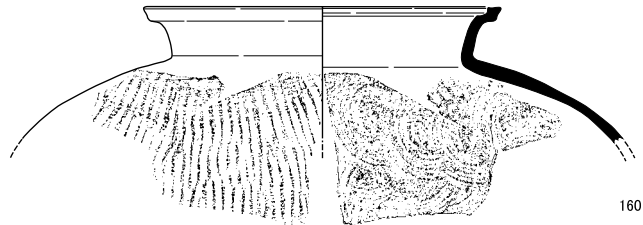
156



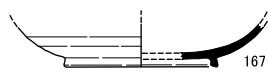
159



158



160



167



168



图24 土器実測图5 (1:4)

体部外面上方はオサエ、下方はハケメ。口縁部内外面はナデ調整、体部内面はオサエ。

溝208(140)(図24) 土師器甕(140)は体部上段はやや内傾し、口縁部は「く」の字状に外反する。口縁端部は内側に巻き込んで肥厚する。調整は体部外面上方はオサエ後ハケメ、体部内面はオサエ。口縁部外面はオサエ後ナデ、内面はナデを施す。

土坑156(141)(図24) 須恵器杯(141)は平底で体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラオコシ、体部内外面はナデ調整である。

平安時代整地層(142～155)(図24) 出土土器には土師器皿(142)・杯(143・144)、須恵器杯蓋(145)・鉢(146)・甕(147)、緑釉陶器皿(148)・椀(149～151)、灰釉陶器皿(152～155)などがある。

142は平坦な底からやや丸味をもって立ち上がり、外反気味に開く口縁部をもつ。端部は内に巻き込むように肥厚する。調整は体部外面はケズリ、口縁部外面と内面はナデを施す。143・144は高台を貼り付ける杯である。ともに平らな底部から体部は内弯気味に開き、口縁部はわずかに屈曲して、端部は内側に肥厚する。調整は体部外面はケズリ、口縁部外面と内面はナデを施す。145は天井部は平坦で、口縁部は屈曲し、端部は下方へ突き出す。天井部外面はヘラオコシ、内面はナデ調整。146は口縁部は短く、体部から「く」の字状に屈曲し、外反する。端部上端は平坦な面をつくる。調整は体部・口縁部内外面ナデ調整である。147は甕体部の破片で、表面にタタキの上から「○」に「十」の窯印を施す。内面は横方向と縦方向のナデ調整がある。148の底部は欠損する。体部は浅く口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部付近内面に1条の凹線を施す。全面ミガキで、ハケで全面に施釉する。山城産。149～151は底部の破片である。149は貼付高台で、調整は内外面ナデ、ハケで全面に施釉する。150は貼付高台で、底部外面に糸切り痕が付く。高台内は露胎する。149・150はともに近江産で、時期はⅢ期に属する。151は削出高台で、内外面ナデ調整。高台内以外は施釉する。篠産。152は貼付高台で、内面のみに施釉する。153は貼付高台である。底部から丸味をもった体部が浅く開く。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。体部外面はナデ、内面はナデ調整で、内面のみ施釉する。154は体部が直線的に浅く開く。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部は欠損する。体部外面はナデ、内面はナデ調整で、内面のみ施釉する。155は広縁の段皿で、外面にも段が付く。底部は欠損する。体部段の下方外面はケズリ後ナデ、他の部位はナデ調整で、内面のみ施釉する。

その他遺構(156～168)(図版10、図24) 156は土師器高杯の脚部である。棒状の芯に粘土を巻き付け、外面を上方に向けてケズリ調整、断面は八角形を呈す。中空部は裾部に向かって広がる。溝100から出土した。157は須恵器杯である。平底で体部は外上方へ開く。口縁端部は丸くおさめる。底部外面はヘラオコシ、体部内外面はナデ調整である。土取穴から出土した。158は須恵器皿である。体部は浅く口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。削出高台で、底部外面は糸切り痕が残る。底部外面に「政」と読める墨書がある。土取穴から出土した。159・160は須恵器甕である。ほぼ同じ型式の口縁をもつ。160は大きく広がり丸みをもつ肩部から口縁部は外反、屈曲して立ち上がる。口縁端部上端は平坦である。体部内外面はタタキを施す。口縁部内外面はナデ調整。

土取穴から出土した。159は160より口縁部が長い。礫混じりの床土から出土した。161は緑釉陶器皿である。底部から丸味をもった体部が浅く開く。口縁部は外反し、端部は丸くおさめる。底部に高台を貼り付ける。全面ミガキで、ハケで全面施釉する。丁寧な作りである。猿投産。土取穴から出土した。162・163は緑釉陶器椀である。162は体部は直線的に開き、体部外面下方で屈曲して外上方に立ち上がり稜線が付く。口縁部は小さく外反し、端部は丸くおさめる。削出の蛇の目高台である。体部外面はケズリ後ナデ、内面は粗いミガキ調整で、全面に施釉する。京都産。室町時代の耕作土から出土した。163は体部が丸味をもって開き気味に立ち上がる。削出高台で、口縁部は欠損する。体部外面下方はケズリ後ナデ、内面は粗いミガキ調整で、高台内は露胎する。礫混じりの床土から出土した。164・165は緑釉陶器の底部で器形不明である。164は高台が貼り付けで、調整は内外面ナデ、近江産で、時期はⅢ期の平安時代中期に属する。溝120から出土した。165は削り出しの蛇の目高台で、底部外面はミガキ、内面は磨滅で不明。ハケで全面に施釉する。猿投産。溝120から出土した。166は緑釉陶器壺である。大型壺の底部で、内外面ともナデ調整で、体部・底部外面に施釉する。京都産。溝5から出土した。167は灰釉陶器椀である。貼付高台で、体部は丸味をもって開き気味に立ち上がる。口縁部は欠損する。体部外面下方はケズリ後ナデ、内面のみに施釉する。土取穴から出土した。168は灰釉陶器段皿である。広縁の段皿で、外面には段を付けない。貼付高台で、体部段の下方外面はケズリ後ナデ、他の部位はナデ調整で、内面のみ施釉する。溝24から出土した。

室町時代 (169～177) (図25)

土師器皿・釜、瓦器椀・鍋・釜、須恵器鉢、焼締陶器甕・播鉢、施釉陶器おろし皿、中国製白磁椀などがあるが、ほとんどが小片である。室町時代の土器は耕作土や耕作溝から出土した。

169は白色系土師器小皿である。調整は口縁部内外面は横ナデである。Ⅸ期に属する。溝68から出土した。170は白色系土師器大皿である。体部は緩やかに開き、器壁は薄い。調整は口縁部内外面は横ナデ。Ⅶ期でも新しい時期に属する。溝4から出土した。171は土師器のミニチュアの羽釜である。口縁部外面に鏝が付く。調整は口縁部内外面はナデである。溝4から出土した。172は瓦器羽釜である。口縁部下方に断面三角形の鏝を貼り付ける。調整は内面はハケメである。溝68から

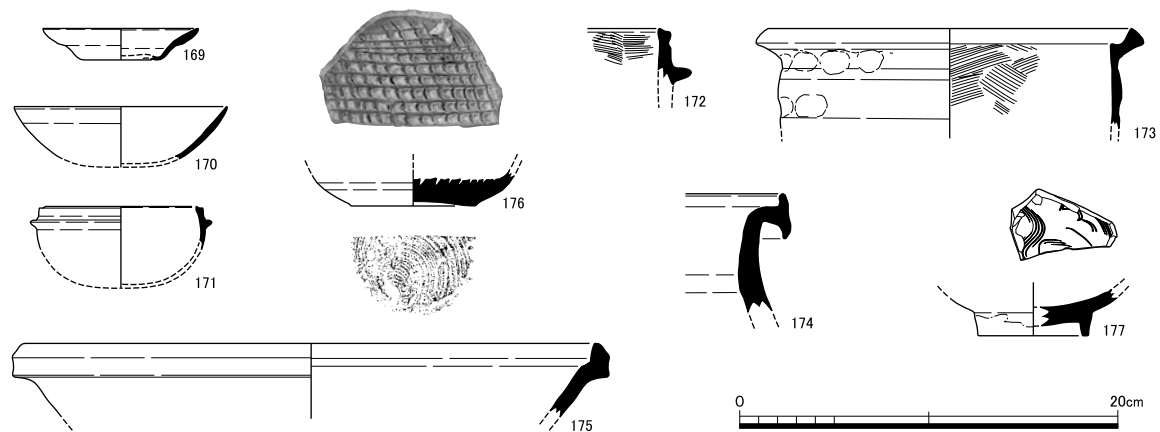


図25 土器実測図6 (1:4)

出土した。173は瓦器鍋である。口縁は斜めに開き気味に付く。調整は内面ハケメ、外面はオサエである。溝49から出土した。174は常滑産の焼締陶器甕である。口縁端部は折り返される。鎌倉時代後期から室町時代初期に属する。耕作土から出土した。175は東播系軟質須恵器の鉢である。口縁部は立ち上げ、端部はつまみ上げる。鎌倉時代後期から室町時代初期に属する。溝68から出土した。176は瀬戸産施釉陶器の灰釉おろし皿である。ヘラ刻みのおろし目が底部内面全面に施す。底部外面は糸切り痕が付く。溝51から出土した。177は中国産白磁椀である。底部内面に櫛描き文を施す。貼付高台で、高台内は露胎する。礫混じりの床土から出土した。

江戸時代

遺物には、焼締陶器播鉢、施釉陶器天目椀、国産磁器染付などがある。土取穴や洪水砂礫層などから出土した。小片で図示していない。

(3) 瓦類

瓦には、軒丸瓦・軒平瓦・丸瓦・平瓦がある。平安時代前期に属するものを中心に奈良時代のものや平安時代後期のものが出土している。奈良時代の瓦は搬入瓦である。出土した軒瓦は総数33点で、内訳は軒丸瓦14点、軒平瓦19点である。このうち軒瓦13点、平瓦2点を図示した。時期は奈良時代が7点、長岡京期が1点、平安時代前期が6点、後期が1点ある。

軒瓦 (図版11、図26)

瓦1 単弁蓮華文軒丸瓦である。単弁は18弁、子葉はなく連子は1+4、外区に珠文が巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加して接合する。瓦当部側面上半は横ナデ。胎土は砂粒・小礫を含む灰白色で硬質である。『長岡京期の古瓦聚成』¹⁾乙訓寺出土の軒丸瓦14と同文である。他に島津3・5・6次調査で出土している。長岡京期に属する。建物1柱穴170から出土した。

瓦2 単弁蓮華文軒丸瓦で、間弁はT字形で弁端に接する。子葉は盛り上がり、外区に珠文が巡る。磨滅で調整は不明。胎土は砂粒を含み、灰白色で軟質である。奈良時代に属し、平城宮6314型式である。平安時代整地層から出土した。

瓦3 単弁蓮華文軒丸瓦である。単弁は15弁、子葉はなく連子は1+6。外区に珠文が巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加して接合する。胎土は砂粒を含む灰色で硬質である。『坂東善平収蔵品目録』²⁾324と同文である。また、平安宮太政官跡でも同文が出土している。³⁾芝本瓦窯産で、平安時代前期に属する。溝10から出土した。

瓦4 複弁八葉蓮華文軒丸瓦である。子葉は盛り上がり、連子は1+6。外区に珠文が巡る。瓦当部裏面上部に丸瓦をあて粘土を付加して接合する。胎土は砂粒・小礫を含む灰白色で軟質である。西賀茂瓦窯産で、平安時代前期に属する。整地層から出土した。

瓦5 複弁蓮華文軒丸瓦である。間弁があり、界線は二重で外区に珠文が巡る。中房は欠損している。胎土は砂粒・小礫を含む灰白色で軟質である。『平安京古瓦図録』⁴⁾36・37と同文である。西賀茂瓦窯産で、平安時代前期に属する。溝152から出土した。

瓦6 蓮華文軒丸瓦である。残存部が少なく、瓦当の文様は不明で、やや小振りの瓦である。側

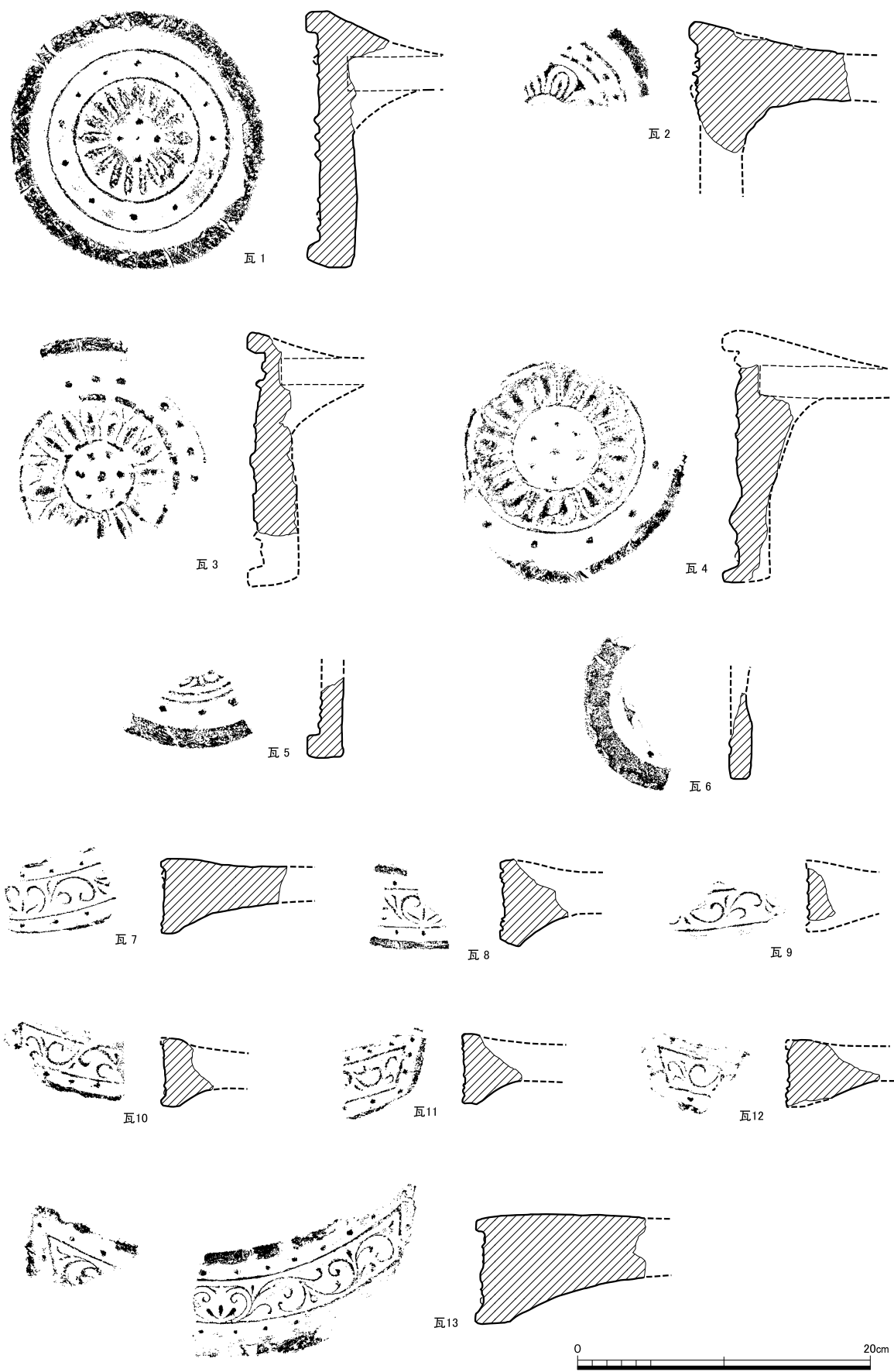


图26 軒瓦拓影·实测图 (1 : 4)

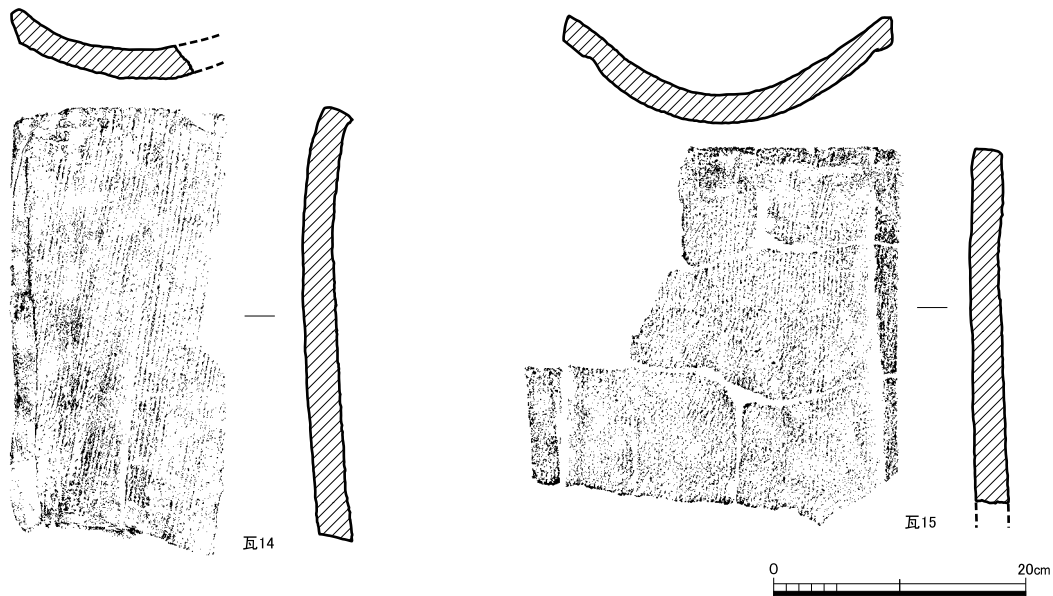


図27 平瓦拓影・実測図（1：6）

面は縦ナデ、裏面横ナデで、上部はオサエ。胎土は砂粒界線含む灰白色で軟質である。山城産で、平安時代後期に属する。溝152上面から出土した。

瓦7～瓦13は均整唐草文軒平瓦で、瓦7～瓦9、瓦10～瓦12はそれぞれ同文である。

瓦7～瓦9 中心飾りが上向きC字形の中に3葉を配し、主葉・子葉が巻き込み転回する。外区に珠文が巡る。曲線顎。全体に磨滅しており、瓦部凹面に布目がわずかに残る。奈良時代に属し、平城宮式6721型式である。『木村捷三郎収集瓦図録』1113・1114と同文である。他に乙訓寺や長岡京で出土している。瓦7は胎土は小礫を含み精良な土、褐灰色でやや軟質である。溝152下層から出土した。瓦8は中心部のみの残存で、胎土は砂粒を含み、灰色で軟質である。建物1柱穴186から出土した。瓦9は、中心部や周縁・顎は欠損する。胎土は砂粒を含み、褐灰色でやや軟質である。整地層から出土した。

瓦10～瓦12 唐草の主葉と子葉が巻き込み転回する。外区に珠文が巡る。曲線顎である。いずれも小片で磨滅しており調整は不明である。胎土は砂粒を含む灰白色で軟質。『木村捷三郎収集瓦図録』1206と同文である。奈良時代に属し、平城宮6721型式である。整地層から出土した。他に井手廃寺で出土している。

瓦13 均整唐草文軒平瓦である。唐草の主葉は連続して大きく反転し、支葉は巻き込む。外区は珠文が巡る。曲線顎。瓦当部凹面横ケズリ、顎凸面縦ケズリ、裏面横ナデ、側面は縦ケズリ。胎土は砂粒含む灰白色で硬質である。『木村捷三郎収集瓦図録』750と同文である。西賀茂瓦窯産で、平安時代前期に属する。整地層から出土した。

平瓦（図27）

瓦14 長さ35.0cm、幅15.5cm以上、厚さ2.4cmある。側面・端面はケズリ。凹面は布目、凸面は縄目で離れ砂がつく。胎土は砂粒を含む紫灰色で堅緻である。打ち欠いて半裁し、熨斗瓦として使用したものである。平安時代前期に属する。建物1柱穴171から出土した。

瓦15 長さ30.2cm以上、幅25.5cm、厚さ2.2cmある。側面・端面はケズリ。凹面は布目がわずかに残存、凸面は縄目で両面に離れ砂がつく。胎土は砂粒・小礫を含む紫灰色で硬質である。平安時代前期に属する。溝152下層から出土した。

(4) 土製品 (図版12、図28)

土製品には硯・土馬などがある。

土1 須恵器の円面硯で、硯部とそれに続く圈台の一部が残存する。圈台の上端に高い外堤を、外堤下端に断面三角形の凸帯を巡らす。硯面は凸面で盛り上がり陸部と海部に稜をつける。圈台には透かしを入れた切り込み痕が残る。胎土は精良で灰色を呈し、固く焼き締まる。調整は内外面ともナデで、硯面は滑らかで墨痕が残存する。平安時代前期に属する。土取穴から出土した。

土2 土馬である。胴体と後ろ足の一部が残存する。磨滅で調整は不明である。平安時代前期に属する。溝10から出土した。

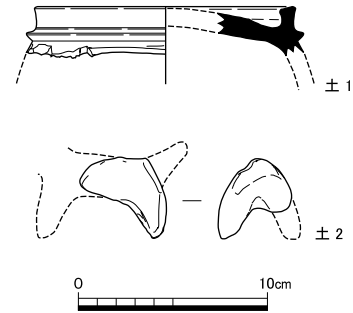


図28 土製品実測図 (1 : 4)

(5) 金属製品 (図版12、図29)

金属製品には鉄釘・銭貨などがあるが、極少量である。ここでは釘のみを図示した。

鉄釘 (金1・金2) 金1・金2はともに断面が方形で、金2は先端は破損している。平安時代前期に属する。金1は整地層、金2は溝10下層で検出した。

銭貨は江戸時代の「寛永通寶」がある。土取穴から1枚出土した。

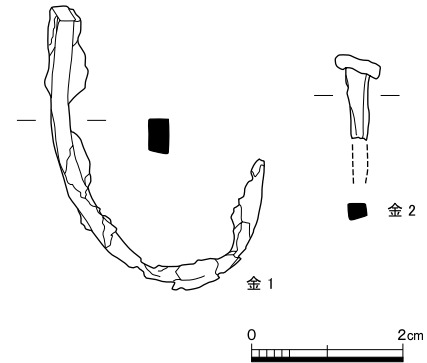


図29 金属製品実測図 (1 : 1)

(6) 石製品 (図30)

石製品には砥石がある。すべて室町時代に属する。室町時代の耕作土や土坑などから出土した。

砥石 (石1～石3) 石1は一方が欠損する。表・両側面・端面の4面が滑らかで磨滅する。表面に研ぎ痕がつく。石材は明オリーブ灰色の粘板岩で、やや軟質である。室町時代の耕作土から出土した。石2は一方が欠損し、上端面に切断痕がある。表面は滑らかで磨滅する。石材は淡黄色の粘板岩で、やや軟質である。土取穴から出土した。

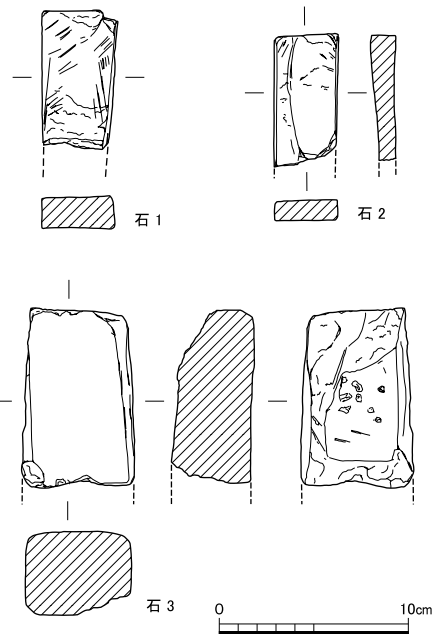


図30 石製品実測図 (1 : 4)

石3は一方と裏面の一部が欠損する。表・裏・両側面・端面の5面が滑らかで磨滅する。石材は黄橙色の粗砂を含む砂岩である。土坑36から出土した。

(7) 木製部材 (図版12、図31・32)

木製部材には溝の護岸杭や柱穴の礎板、柱根などがある。礎板は遺存が良好なものや加工痕が残るものを図示した。すべて平安時代前期に属する。

礎板(木1～木8) 木1は断面形が長方形で、長さ61.6cm、幅32.8cm、厚さ9.0cmある。両端面に道具による切断痕がつく。建物部材を礎板に転用したのものと考える。建物1柱穴171から出土した。材質はヒノキである。木2は薄板で、断面に1枚の板を道具で切断した痕がつく。復元長は64.5cm、幅14.4cm、厚さ3.0cmある。木1の下層から出土した。材質はスギである。木3は断面形が長方形で、長さ59.4cm、幅33.6cm、厚さ10.0cmある。端面に切断痕がつく。建物1柱穴172から出土した。材質はヒノキである。木4は断面形が歪な長方形で、長さ59.5cm、幅35.5cm、厚さ11.5cmある。隅に1箇所穿孔がある。運搬の際の筏穴と考える。建物1柱穴175から出土した。材質はスギである。木5は断面形は歪な長方形で、長さ66.7cm、幅41.2cm、厚さ14.4cmある。端面に切断痕がつき、もう一方の端は腐植している。建物1柱穴180から出土した。材質はヒノキである。木6・7は薄板で、木6は長さ34.1cm、幅16.5cm、厚さ3.6cmあり、木7は長さ33.2cm、幅16.6cm、厚さ3.1cmある。ともに一方を三角に削り、もう一方の端は欠損している。建物2柱穴197から出土した。材質はともにスギである。木8は断面形がほぼ正方形で、長さ38.8cm、幅24.8cm、厚さ22.8cmの直方体である。端面は中央に向かって道具のケズリ痕がつく。建物部材を切断して礎板に転用したのものと考える。建物2柱穴196から出土した。材質はヒノキである。

柱根(木9) 断面形が八角形で、面取りをしている。、残存長47.2cm、径40.0cmある。柱の下には厚さ約1cmの礎板が据えられていた。建物4柱穴3から出土した。材質はヒノキである。

(8) その他の遺物

炭片 各時代の遺構や整地層から出土した。細片が多く、樹種の同定はしていない。

植物遺体 室町時代の耕作土や溝、平安時代前期の遺構から植物の種が出土した。スモモは建物1柱穴172、サクラ属は溝10下層、モモは溝10上層、クルミは耕作溝55・45や耕作土から出土した。

註

- 1) 『長岡京の古瓦聚成』向日市教育委員会 1987年
- 2) 『坂東善平収蔵品目録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1980年
- 3) 『平安京跡発掘調査報告 昭和55年度』京都市埋蔵文化財調査センター 1981年 図版10の4
- 4) 『平安京古瓦図録』雄山閣 1977年
- 5) 『木村捷三郎収集瓦図録』(財)京都市埋蔵文化財研究所 1996年

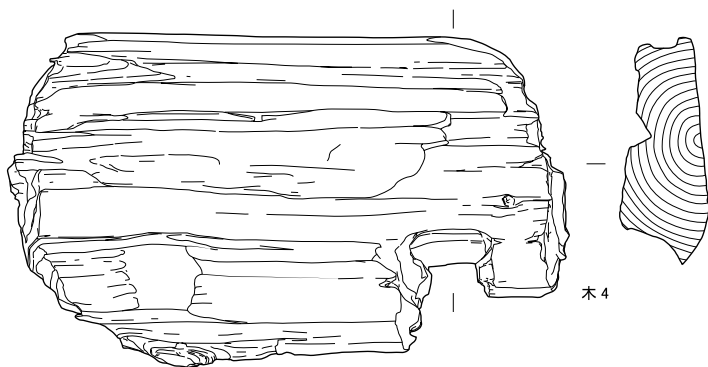
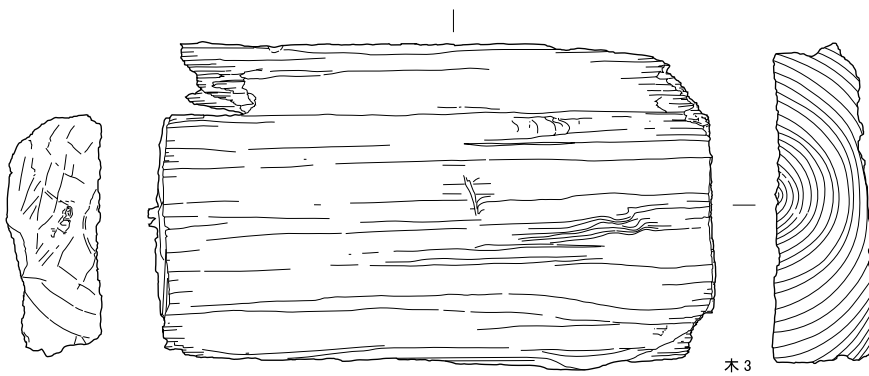
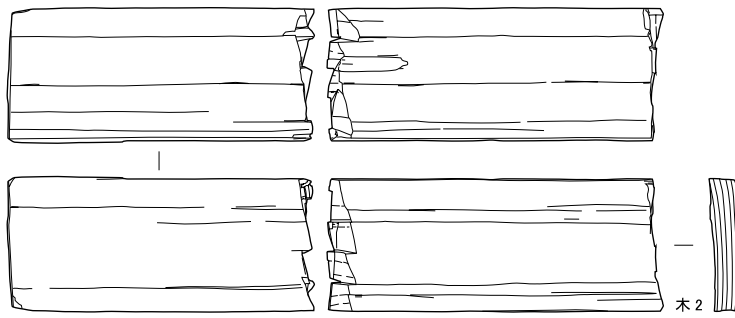
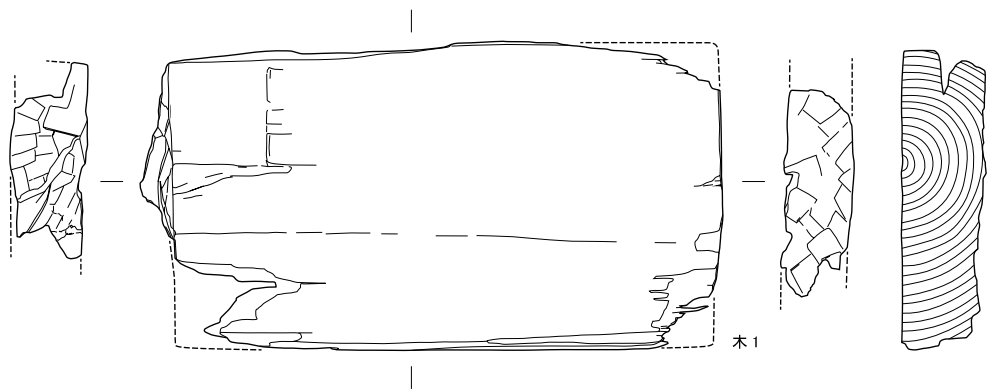


图31 木製部材実測图1 (1:8)

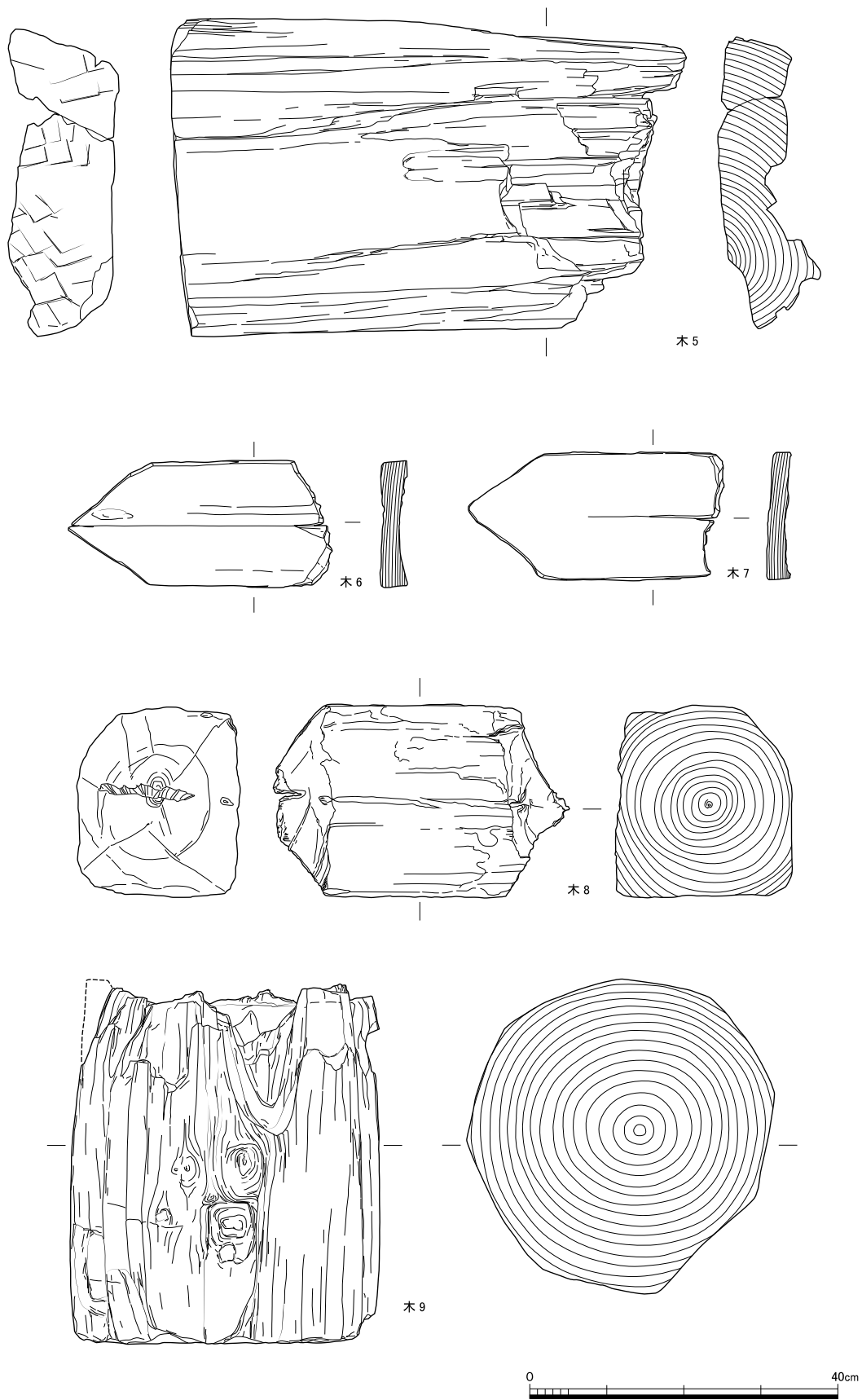


图32 木製部材実測図2 (1:8)

5. ま と め

今回の調査では、次のような調査地のようすを明らかにすることができた。

古墳時代 (図33)

今回の調査で検出したものに、古墳時代前期から中期に属する溝219・溝89などがある。北隣の10次調査では、弥生時代から古墳時代の流路や古墳時代前期から中期の溝を検出している。溝219・溝89は、これらの溝の延長部と考えられる。また、溝88は形状から方形周溝墓の周溝が想定できる。これらのことから、近隣に集落に伴う墓域がある可能性も考えられる。

平安時代前期 (図34)

右京三条三坊では、これまでに12件の調査を実施しており、平安時代の遺構を多数検出している。今回の調査でも平安時代前期の建物、溝など多くの遺構を良好な状態で検出することができた。

条坊関連の遺構としては、まず宇多小路東築地1と内溝152、姉小路南築地の内溝10を検出した。この溝152と溝10は北西部で合流し、溝10は築地1を潜って西行している。宇多小路東築地の内溝152は、当初2.8～4.2mの幅で造作されており、雨水・湧水対策として、幅を広く構えた可能性がある。その後、溝152は建物2の西側部分が埋められて、新たに雨落溝205を開削したことが判明した。溝152底部には泥土層が堆積しており、常に流水があり、満水時は溝10を介して排水されていた様子が想定できる。また、姉小路南築地の内溝10は、建物1の北側で幅を狭め雨落溝の機能を有していたこと、さらに西では不定形に広がった窪地を整地した(整地166)後に溝を開削していることも判明した。このように、条坊

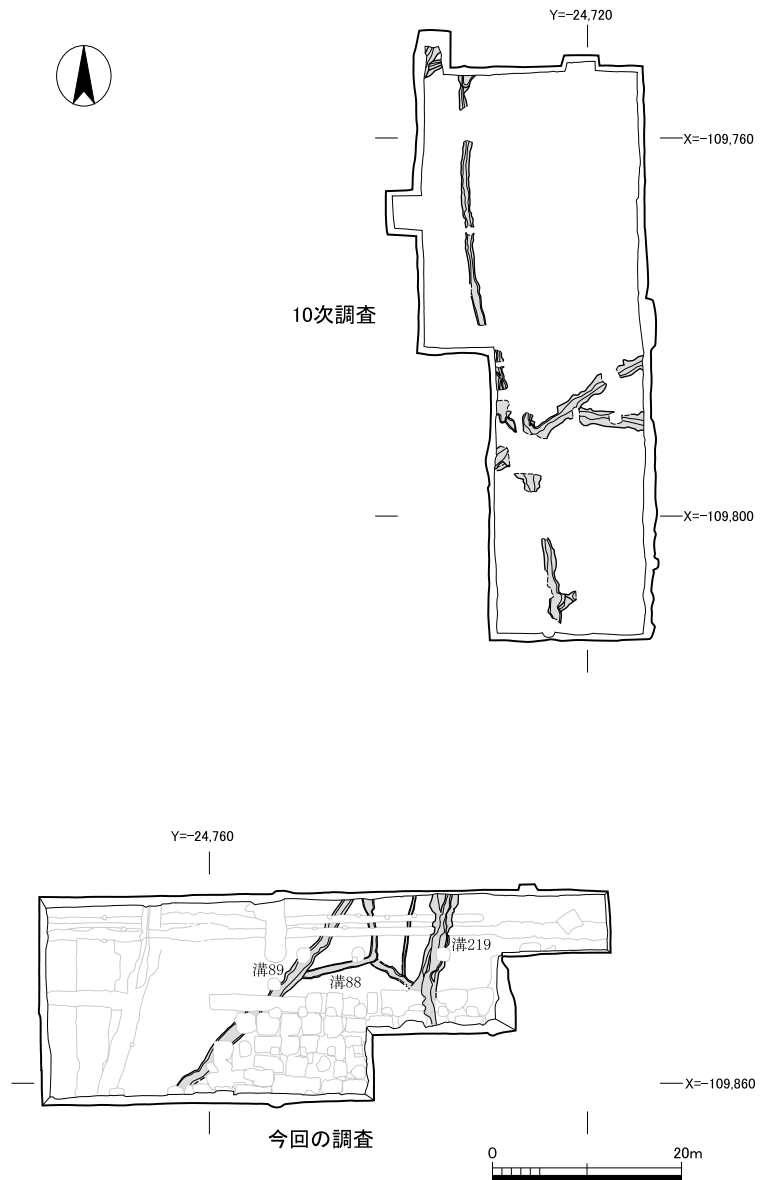


図33 古墳時代遺構配置図 (1 : 800)

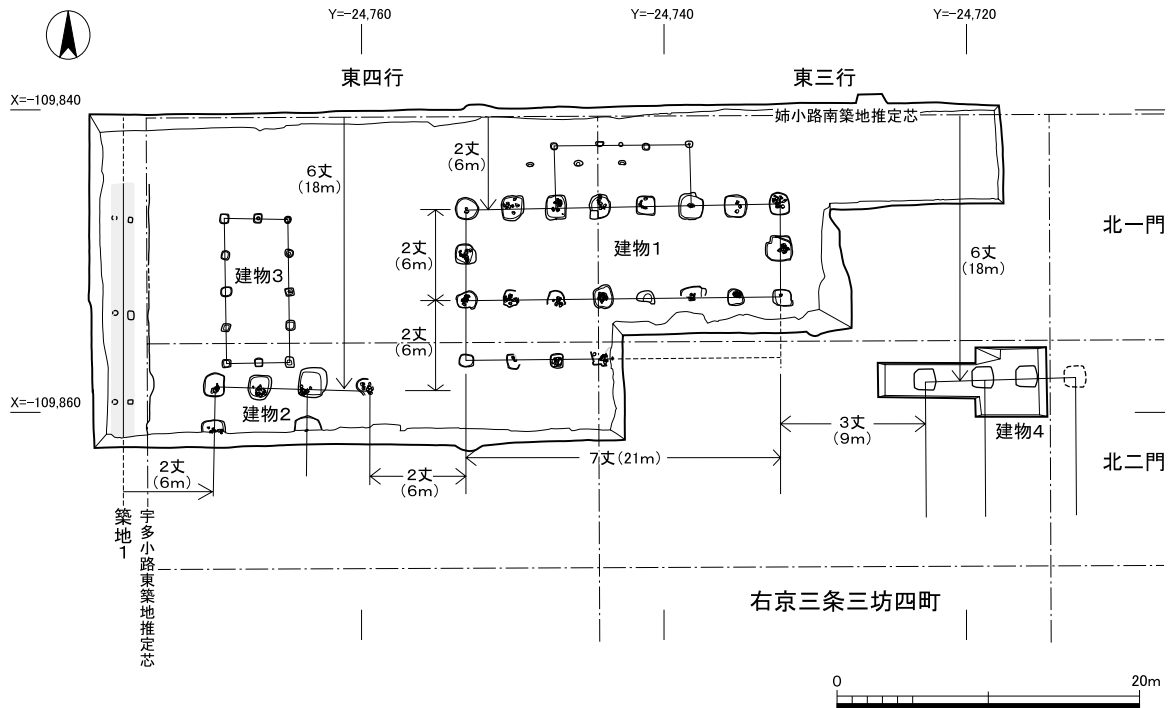


図34 建物配置図 (1 : 500)

関連の内溝は、建物配置と極めて密接な関連性を有していた事が窺われる。なお、これらの溝は建物が廃絶されると機能しなくなる。また、溝10から出土したウメ、モモ、サクラ属の種子や花粉分析で検出したマツ属などは、建物の敷地内にこれらの樹木が植えられていた可能性があることを窺わせる。

建物1・2・4は、平安京でも最大級の掘立柱建物といえる。建物1は、東西棟で左右にはほぼ同規模の南北棟が配置され、コの字形配置を示しており、正殿であった可能性は高い。これらの建物配置は、建物1を中心にみると、

- ①建物1西柱筋は、築地1から東に7.5丈 (22.5m) に位置する。
- ②建物1北柱筋は、姉小路南築地推定芯から南に2丈 (6m) に位置する。
- ③建物1は、桁行7丈 (21m)、梁行2丈 (6m)。
- ④建物2西柱筋は、築地1から東に2丈 (6m) に位置する。
- ⑤建物2棟柱筋は、建物3棟柱筋と揃う。
- ⑥建物3南柱筋は、建物1庇柱筋と揃う。
- ⑦建物2・4北柱筋は、姉小路南築地推定芯から南に6丈 (18m) で、南北建物の北柱筋の位置は、東西で揃う。
- ⑧建物2庇柱筋は、建物1西柱筋から西に2丈 (6m)。建物4庇柱筋は、建物1東柱筋から東に3丈 (9m) で、建物2の位置とは1丈 (3m) ずれが生じる。

以上のことが確認でき、建物配置は計画的に作られたことがわかる。ただし、柱穴から出土した礎板をみると、建物1は大きさの揃った木材を使用しているが、建物2は立方体の材木や切石など使用するなど、材や大きさが揃っていない。

四町における築地や区画溝、建物配置からは、今回検出した建物群は四町内でおさまるものと考えられる。しかし、四町の宅地内の建物配置は、建物群の規模や規則性に比べ、建物位置が四町の中心ではなく北西側に寄る傾向にある。近隣の町では湿地状の堆積部分を避けて建物を配置していた実例があることから、四町でも建物立地で制約を受けているためと推測できる。四町の東側は河川の氾濫や湿地が広がっていた可能性がある。

また、四町の南東部（3次調査）で検出した道祖大路西側溝に架かる橋跡などの関連も含めて、周囲の調査が進めば四町の様子がさらに明らかになるであろう。

6. 付章 自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

今回の分析調査では、平安時代前半の古植生に関する情報を得ることを目的として、当該期の溝152について花粉分析と種実分析、溝10について花粉分析を実施する。

1. 試料

調査地点である各溝の断面図および試料採取位置の模式柱状図を図35に示す。各溝断面より不攪乱柱状試料を採取し、室内にて各分析用試料を採取した。分析層準は、溝152の4・5層（試料番号1・2）、溝10の3層（試料番号1）の3層準で、花粉分析は3点全て、種実分析は溝152の5層（試料番号2）について実施する。各調査地点の堆積物の層相を以下に示す。

溝152：2層は大礫～小礫混じりの砂質泥ないし、その偽礫からなる。人為的営力により形成された堆積物である。4層は小礫混じりの黒色を呈する腐植質泥からなり、下部は6層に漸移する。6層は溝掘削時の基盤堆積物に由来する偽礫が散在する暗灰色を呈する泥からなる。

溝10：1層は人為的営力により形成された埋め戻し堆積物で、大礫～小礫、亜角で大きさが不揃いな砂質泥の偽礫からなる。2層は黒色を呈する礫・砂混じり、腐植質泥からなる。下部は3層に漸移する。3層は溝掘削時の基盤堆積物に由来する偽礫が散在するやや腐植を含む暗灰色泥からなる。

2. 分析方法

(1) 花粉分析

試料約10gについて、フッ化水素酸による泥化、水酸化カリウムによる腐植酸の除去、0.25mmの

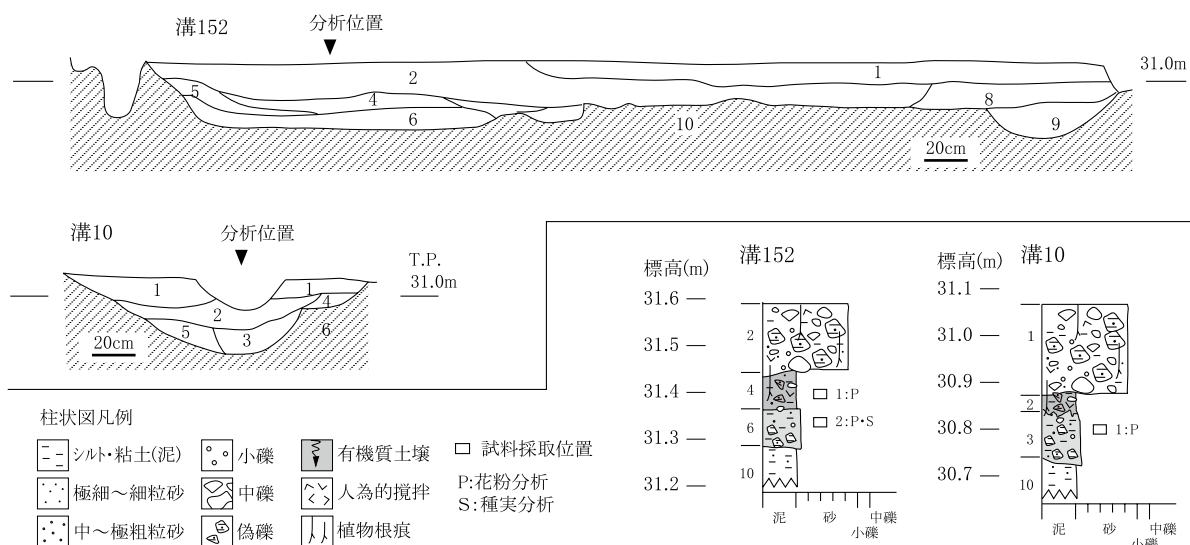


図35 溝断面図および分析地点の模式柱状図

篩による篩別、重液（臭化亜鉛，比重2.3）による有機物の分離、フッ化水素酸による鉱物質の除去、アセトリシス（無水酢酸9：濃硫酸1の混合液）処理による植物遺体中のセルロースの分解を行い、花粉を濃集する。残渣をグリセリンで封入してプレパラートを作成し、400倍の光学顕微鏡下で、出現する全ての種類について同定・計数する。同定は、当社保有の現生標本はじめ、Erdman (1952,1957)、Faegri and Iversen (1989) などの花粉形態に関する文献や、島倉 (1973)、中村 (1980)、藤木・小澤 (2007) 等の邦産植物の花粉写真集などを参考にする。

結果は同定・計数結果の一覧表、及び花粉化石群集の層位分布図として表示する。また、残渣量や花粉化石の保存状態等の情報についても記録する。図表中で複数の種類をハイフオンで結んだものは、種類間の区別が困難なものを示す。図中の木本花粉は木本花粉総数を、草本花粉・シダ類胞子は総数から不明花粉を除いた数をそれぞれ基数として、百分率で出現率を算出し図示する。

(2) 種実分析

試料200ccを水に浸し、粒径0.5mmの篩を通して水洗する。篩内の試料を粒径別にシャーレに集めて双眼実体顕微鏡下で観察し、同定が可能な種実遺体をピンセットで拾い出す。しかし、種実遺体が確認されなかったため、200cc (362g) を追加分析したため、合計400cc (674g) を分析したことになる。

3. 結果

(1) 花粉分析

結果を表4、図36に示す。溝埋土の花
粉化石群集は3点とも類似する。産出する花粉化石の保存状態は悪い。種類数は少なく、シダ類胞子や針葉樹花粉に組成が偏る傾向にある。構成比はシダ類胞子が全体の半分以上を占め、残りが木本花粉、草本花粉はほとんどみられない。

木本花粉ではモミ属、ツガ属、マツ属が多産し、スギ属、コウヤマキ属等を含め、大部分が針葉樹花粉である。広葉樹花粉は、コナラ亜属、アカガシ亜属、ニレ属一ケヤキ属が少量検出される程度である。

草本花粉は、イネ科、キク亜科などが検出されるが種類数、割合共に少ない。

(2) 種実同定

通常の仕様である1式200cc (312g) の

表4 花粉分析結果

種 類	地点・試料番号		
	溝152 1	溝152 2	溝10 1
木本花粉			
マキ属	2	2	1
モミ属	43	54	63
ツガ属	69	89	73
トウヒ属	1	2	1
マツ属単維管束亜属	1	-	1
マツ属複維管束亜属	16	20	13
マツ属(不明)	37	46	40
コウヤマキ属	-	6	-
スギ属	1	1	7
イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科	-	1	-
コナラ属コナラ亜属	-	-	4
コナラ属アカガシ亜属	-	1	-
ニレ属一ケヤキ属	-	1	2
草本花粉			
サジオモダカ属	2	-	-
イネ科	4	2	7
サナエタデ節-ウナギツカミ節	-	2	2
ナデシコ科	-	1	-
フウロソウ属	1	5	-
アリノトウグサ属	2	-	-
ヨモギ属	-	-	1
キク亜科	-	1	2
タンポポ亜科	1	4	1
不明花粉			
不明花粉	-	-	2
シダ類胞子			
ゼンマイ属	6	2	-
イノモトソウ属	-	1	-
アカウキクサ属	4	-	-
他のシダ類胞子	304	404	159
合 計			
木本花粉	170	223	205
草本花粉	10	15	13
不明花粉	0	0	2
シダ類胞子	314	407	159
合計(不明を除く)	494	645	377

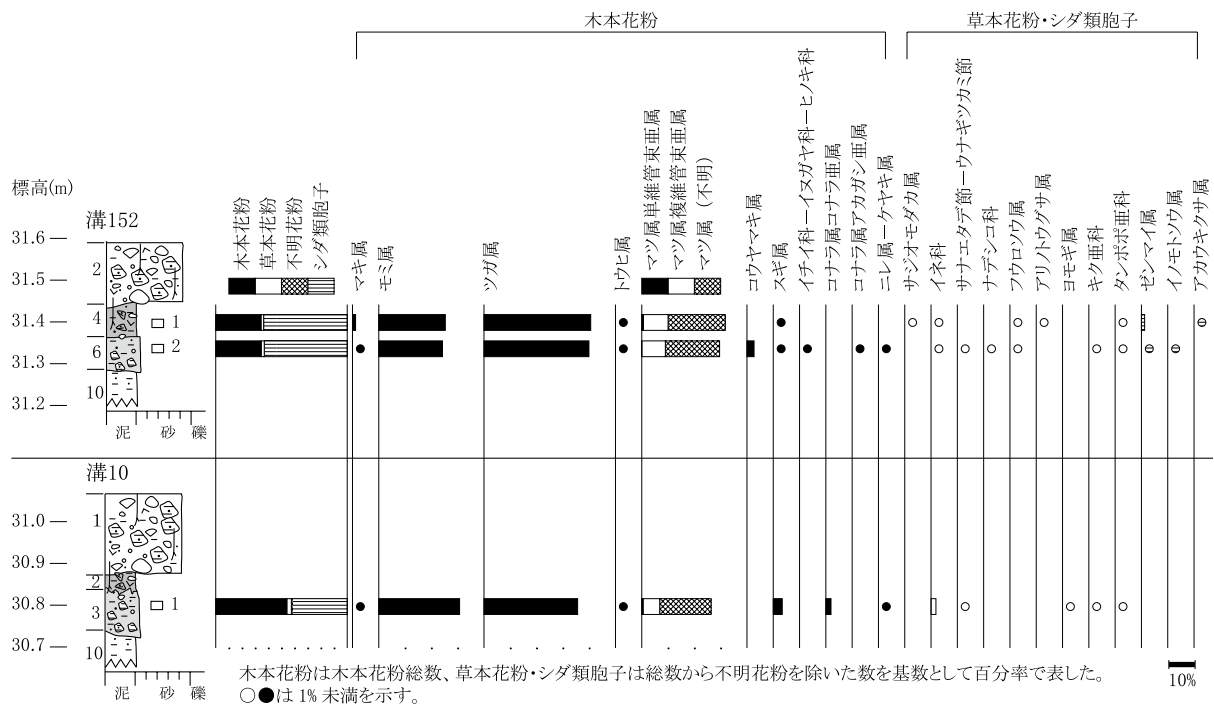


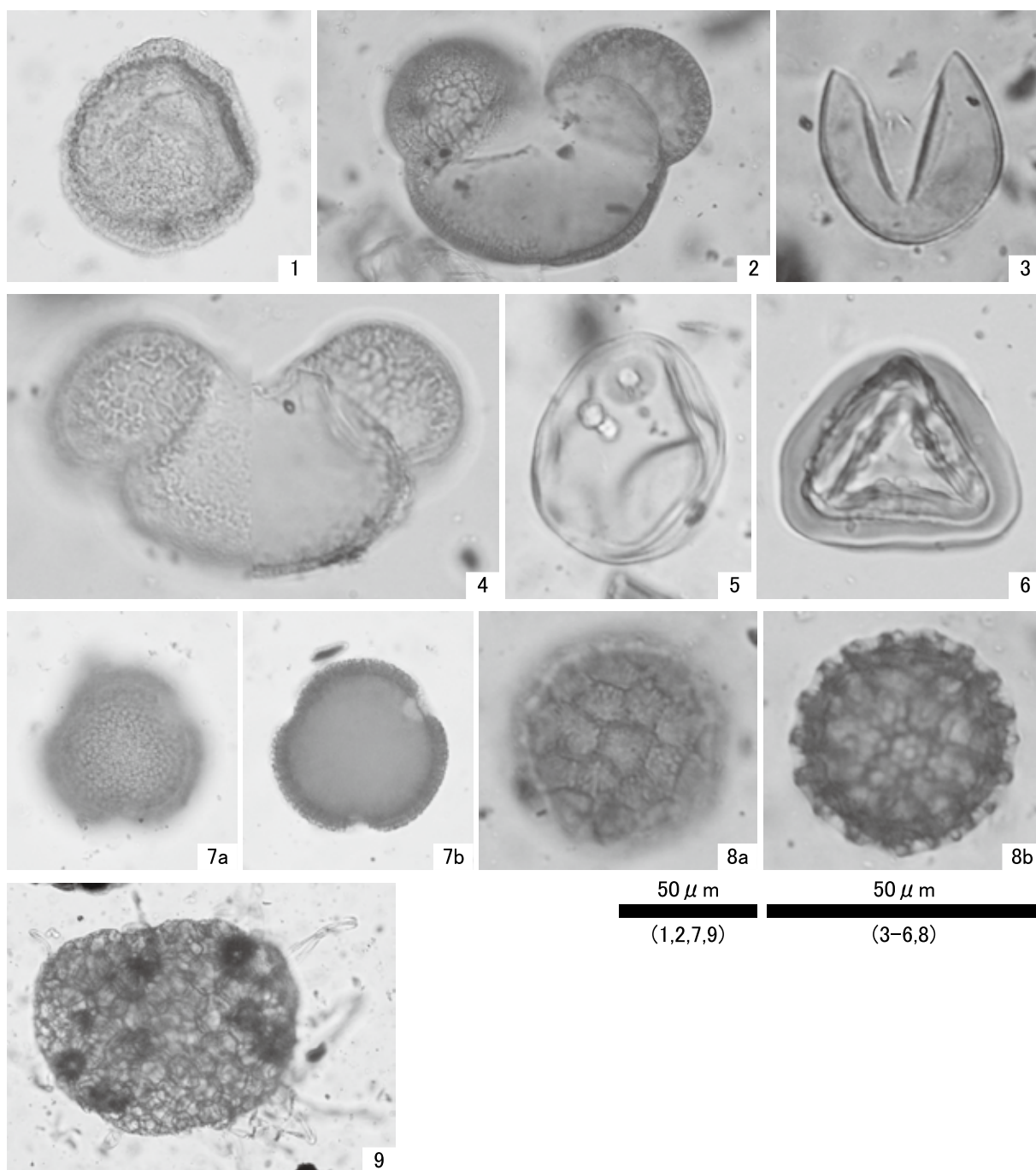
図36 花粉化石群集の層位分布

分析では、種実遺体が確認されなかったため、新たに200cc (362g) を追加し、合計400cc (674g) を分析したが、種実遺体は確認されなかった。種実以外では、炭化材が0.06g検出され、最大径は5.2mmを測る。分析残渣 (36.1g) は、砂礫を主体とする。

4. 考察

今回の平安時代前半の溝充填堆積物中の花粉化石は、いずれの溝も保存状態が悪く、種実遺体は未検出であった。花粉や種実は、大気に曝される好気的環境下では化石として残りにくく風化に弱いことが知られている。このことと層相から、今回調査を行った平安時代前半の溝は定常的に水が存在するような状態ではなく、しばしば乾燥することが多く、土壌生成が進行するような堆積環境におかれていたことが推定される。また、同様の花粉化石の産状は、今回の調査区の北側に隣接する平安京右京三条三坊三町調査区の同時期の土坑275埋土の花粉分析結果 (パリノ・サーヴェイ, 2009) でも確認されており、平安時代前半頃の調査区一帯は土壌生成が進行する安定した土地条件が広がっていたことがうかがえる。

今回の溝堆積物の花粉化石群集はシダ類孢子・針葉樹花粉の多産が特徴であるが、これはシダ類孢子や針葉樹花粉が広葉樹花粉に比べて風化に対する耐性が強いため (中村, 1967; 徳永・山内, 1971; 三宅・中越, 1998 など)、選択的に残ったことが原因と考えられる。花粉化石以外の分析残渣をみると、淡褐色の植物遺体がほとんどなく、風化に強い微粒炭のみで構成されていることから確認できる。したがって、得られた花粉化石群集は偏った組成になっている可能性が高く、針葉樹花粉の産出率は過大評価されていると思われる。ただし、当時の周辺においてこれら針葉樹が生育していたことは確かである。



- | | |
|--------------------|--------------------------|
| 1. ツガ属(溝152;1) | 2. モミ属(溝152;1) |
| 3. スギ属(溝10;1) | 4. マツ属(溝152;1) |
| 5. イネ科(溝10;1) | 6. イノモトソウ属(溝152;2) |
| 7. フウロソウ属(溝152;1) | 8. サナエタデ節—ウナギツカミ節(溝10;1) |
| 9. アカウキクサ属(溝152;1) | |

図37 花粉化石

産出した針葉樹各種類の生態性をみると、モミ・ツガは谷頭や谷斜面、扇状地など土地条件の不安定な場所が更新適地であり、スギは湿潤な土壌を好む種類である。また、マツ属は成長が早く痩地に育つ陽樹であり、二次林を構成することが多い。このような生態性を踏まえると、モミやツガ、スギなどの針葉樹は、北側や東側の山地や山地に続く扇状地に分布していた可能性がある。し

かし、先述したとおり風化により組成が歪曲しているため、実際の周辺植生においては、花粉化石の割合ほど多くなかったと考えられる。針葉樹の分布拡大については、今後、調査地域の地形発達過程を踏まえた評価が必要である。一方、草本花粉は木本花粉に比べて低率で、イネ科やカヤツリグサ科、タンポポ亜科などが僅かに産出するだけであった。発掘調査の結果、当時の調査区一帯が宅地であったとされることも同調的であり、草本植生の発達が貧弱であった可能性がある。

ところで、平安京における古植生に関する情報は、平安京右京五条二坊九町・十六町では平安時代～中世の花粉分析（パリノ・サーヴェイ,1991）、平安京右京三条一坊三・六・七町跡の平安時代の園池埋土の植物化石分析（環境考古学研究会,2002）、平安京右京三条一坊二町跡の12世紀の朱雀大路西側溝埋土の花粉・種実化分析（環境考古学研究会,2004）、史跡二条離宮の9世紀～13世紀まで続く庭園の池埋土の花粉分析（環境考古学研究会,2001）、大覚寺大沢池の12世紀～14世紀の池堆積物の花粉分析（未公表）、平安京右京六条一坊三町跡の12世紀末溝埋土の花粉分析（パリノ・サーヴェイ,2008）など、平安京域各地で断片的であるものの蓄積されてきている。これらの結果をみると、平安時代の花粉化石群集は、草本花粉の割合が高く、イネ属やソバ属などの栽培植物を含むのが特長である。また、広葉樹ではアカガシ亜属やコナラ亜属などが比較的多く産出し、針葉樹では、モミ属、ツガ属、マツ属、スギ属、コウヤマキ属などが産出する。今回の花粉化石群集は、上記したように風化の影響を受け偏った組成になっている可能性があるため、単純に比較できないが、既往の成果と針葉樹の産状が多少異なっている可能性がある。特にマツ属については、マツは有用性や樹形の美しさなどから植栽されることもしばしばあり、平安京の庭園でも植栽されていたことが、文献等の調査により明らかにされている（飛田,2002）。平安京域においてマツ属が増加・多産するようになるのは12世紀末以降の場合が多いが、今回のような宅地域では植栽樹などに由来する可能性もあり、今後の検証が必要であろう。

引用文献

Erdtman G.,1952,Pollen morphology and plant taxonomy: Angiosperms (An introduction to palynology. I) .Almqvist&Wiksell,539p.

Erdtman G.,1957, Pollen and Spore Morphology/Plant Taxonomy: Gymnospermae, Pteridophyta, Bryophyta (Illustrations) (An Introduction to Palynology. II) ,147p.

Feagri K. and Iversen Johs.,1989,Textbook of Pollen Analysis.The Blackburn Press,328p.

藤木利之・小澤智生,2007,琉球列島産植物花粉図鑑.アクアコーラル企画,155p.

環境考古学研究会,2001,自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2001-15 史跡旧二条離宮(二条城),財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,55-58.

環境考古学研究会,2002,自然遺物の環境考古学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2002-5 平安京跡右京三条一坊三・六・七町,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,33-47.

環境考古学研究会,2004,溝64の土壌分析について.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査概報 2004-6 平安京右京三条一坊二町跡,財団法人 京都市埋蔵文化財研究所,21-23.

三宅 尚・中越 信和,1998,森林土壌に堆積した花粉・胞子の保存状態.植生史研究,6,15-30.

- 中村 純,1980,日本産花粉の標徴 I II (図版).大阪市立自然史博物館収蔵資料目録 第12,13集,91p.
- 中村 純,1967,花粉分析.古今書院,232p.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,1991,平安京右京五条二坊九町・十六町発掘調査花粉・植物珪酸体報告,平安京右京五条二坊九町・十六町 京都市右京区西院三蔵町,京都文化博物館,108-116.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2008,付章 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2008-7 平安京右京六条一坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所.39-62.
- パリノ・サーヴェイ株式会社,2009,付論1 自然科学分析.京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告2009-4 平安京右京三条三坊三町跡,(財)京都市埋蔵文化財研究所.44-62.
- 島倉巳三郎,1973,日本植物の花粉形態.大阪市立自然科学博物館収蔵目録 第5集,60p.
- 徳永 重元・山内 輝子,1971,花粉・胞子.化石の研究法,共立出版株式会社,50-73.
- 飛田 範夫,2002日本庭園の植栽史.京都大学学術出版会,435p.

図 版



平安時代全景（西から）



1 建物1 検出状況（西から）



2 建物1 柱穴検出状況（北から）



1 建物1柱穴171断割状況（北東から）



2 柱穴171礎板検出状況（北から）



3 建物1柱穴172断割状況（北西から）



4 柱穴172礎板検出状況（北から）



1 建物1柱穴175礎板検出状況（北から）



2 建物1柱穴182断割状況（南から）



3 建物1柱穴180断面（南から）



1 建物2 (北西から)



2 建物3 (北西から)



1 溝152・築地1（北から）



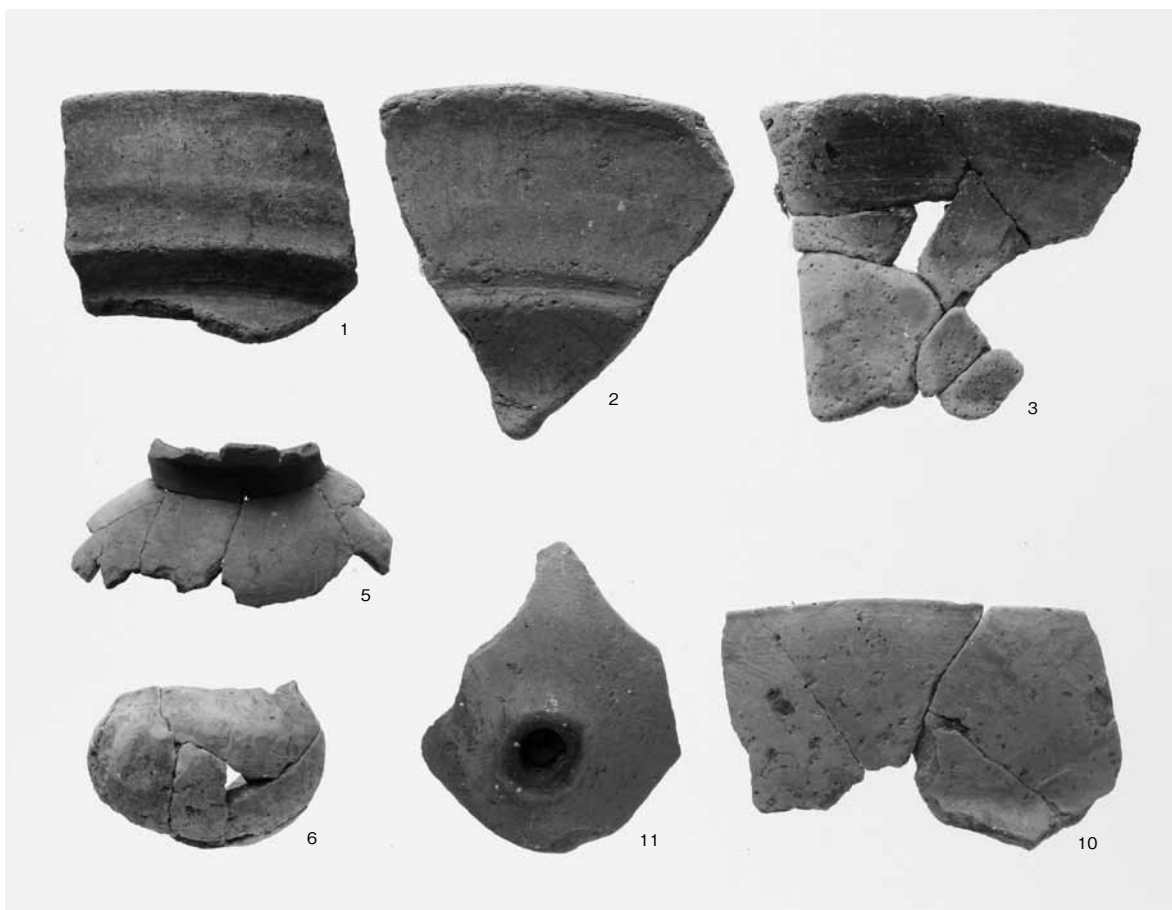
2 溝10・杭列検出状況（西から）



1 溝219検出状況（北北東から）



2 溝89検出状況（北東から）



出土土器 1







瓦 1



瓦 2



瓦 3



瓦 4



瓦 5



瓦 7



瓦 10



瓦 8

瓦 10



瓦 13



報 告 書 抄 録

ふりがな	へいあんきょううきょうさんじょうさんぼうよんちょうあと							
書名	平安京右京三条三坊四町跡							
シリーズ名	京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2012-4							
編著者名	田中利津子							
編集機関	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
所在地	京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1							
発行所	財団法人 京都市埋蔵文化財研究所							
発行年月日	西暦2012年8月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
へいあんきょうあと 平安京跡 にしのきょういせき 西ノ京遺跡	きょうとしなかぎょうく 京都市中京区 にしのきょうくわぼらちょう 西ノ京桑原町 1	26100	1 461	35度 00分 34秒	135度 43分 44秒	2012年3月 5日～2012 年6月23日	1,094m ²	建物建設 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
平安京跡	都城跡	古墳時代	溝	土師器		古墳時代の溝を検出した。 平安時代前期の宇多小路と姉小路の内溝、東西棟の左右に南北棟を配する大型掘立柱建物群を検出した。		
西ノ京遺跡	散布地	奈良時代 ～長岡京期		瓦				
		平安時代	建物、柱穴列、溝、礫敷、整地、築地、柱穴	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、灰釉陶器、瓦、土製品、金属製品、木製品				
		室町時代	耕作溝群、柱穴	土師器、須恵器、瓦器、焼締陶器、施釉陶器、輸入陶磁器、石製品				
		江戸時代	土取穴	焼締陶器、施釉陶器、磁器、銭貨				

京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告 2012-4

平安京右京三条三坊四町跡

発行日 2012年8月31日

編集行 財団法人 京都市埋蔵文化財研究所

住所 京都市上京区今出川通大宮東入元伊佐町265番地の1
〒602-8435 TEL 075-415-0521
<http://www.kyoto-arc.or.jp/>

印刷 三星商事印刷株式会社

住所 京都市中京区新町通竹屋町下る弁財天町298番地
〒604-0093 TEL 075-256-0961